
東方小説(仮)

CROW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方小説（仮）

【Nコード】

N1638Z

【作者名】

CROW

【あらすじ】

ルートごとに設定が異なる主人公の話です。

第一話

13年前

紫「この子は一体何者（何か素質があるわね、しかも妖怪）」

紫音「こ、此処は何処」

彼は記憶喪失だった。しかし名前と言葉は覚えていた。そして日本刀を持っていた。

紫「名前は何」

紫音「紫音」

紫「親は」

紫音「いないよ」

紫「じゃあ私が親になってあげるわ」

そして現代

「もうすぐか」

彼は人里へ向かっていた。

？「ねえ、食べていい？」

「ん」

後ろからルーミアが来たのだった。

ル「食べていい」

「それじゃあ奢ってやるよ」

そして人里

門番「あ、紫音君通りたまえ」

彼は寺子屋へ通っていたので知り合いだった。

門「そいつは」

「こいつも一緒だ」

門「まあいいだろう、くれぐれもそいつから目を離すなよ」

？「見て妖怪だわ」

人々が口々に小声で言っていた。

そしてとある食堂

「いつもの奴、あとこの子にも」

店員「ああ分かった」

1時間後

「そう言えば名前は？俺は八雲紫音」
ル「ルーミア」

「また会おうか」

そして帰った。

第二話

ルーミアは昔異変を起こして封印されていた。しかし封印の札である赤いリボンが老朽化していた。

ル「痛い、ぶつかった？」

彼女が木にぶつかった時リボンが破れた。

ル「あ、リボンが」

そして彼女の体は20代ぐらいに成長して、空が暗くなり日光が遮られ、幻想郷は闇に包まれた。

博霊の巫女は異変と思い解決に向かった。今回は紫も来た。

紫「封印が解けた？」

霊「何か心当たりあるの」

紫「あれは500年ほど前、当時の博麗の巫女が命懸けで封印した妖怪、ルーミアと思うわ」

霊「あのリボンで封印してたの」

紫音は異変の原因を見つけた。

「あれはルーミア？」

ル「そう、私よ」

「これが本来の姿」

ル「早く逃げて、もうすぐ力が溢れ出す」

「俺が止める」

すると闇で出来た大量の槍が飛んで来た。彼は急いでかわしたが右肩に刺さった。

ル「ゆつくりと捌り殺してあげるわ」

彼はスベルを使用した。

「刀符」ざんえいけん「斬影剣」

弾幕ではなく刀身が黒く鍔のない日本刀だった。そして再び彼女が

放った槍を高速で斬った。

ル「じゃあ剣には剣で相手してあげる」

そして彼女が黒い大剣を出した。

「ぐ、重い」

ル「この剣は自由に質量と長さを変化できる」

そして彼女が高速で斬った。彼は吹っ飛んだ。

「まさか斬る直前に重くしたか」

ル「正解」

そして再び振り下ろした。しかし彼女の剣が斬れた。

ル「一体何を」

「この剣は闇を切り裂く」

そして彼は彼女に飛びかかった。

ル「え？」

彼は彼女を抱きしめていた。彼女は彼の腹部を貫いていた。

「あが、もう止めろ」

ル「紫音」

その時無数の弾幕が彼女に向かって飛んで来た。しかし彼が庇い背中で受け止めた。

弾幕を撃ったのは霊夢と紫であった。

霊「紫音！大丈夫」

紫「よくも盾にしてくれたわね」

「霊夢、」

彼は倒れた。

紫「霊夢、殺す気で行きなさい」

ル「あ、紫音」

そして激闘を繰り広げた。そしてルーミアがボロボロになって倒れた。

紫「今回は封印じゃなくて殺す」

その時倒れていた紫音が立ちあがった。傷は消えていた。目の色は赤くなり黒い髪は灰色になっていた。顔はよく見えず赤い瞳が奥で

輝いていた。

「クククク、アッハッハッハ」

そして狂ったように笑い出した。歯は肉食動物みたいに鋭かった。

「そろそろ体に馴染んで来たな」

手には刃の根元に赤い髑髏の飾りが付き、刃が真っ赤な大鎌が現れた。

「すまないなルーミア、間に合わなくて」

ル「し、紫音なの」

紫「何者」

その時突然紫の体から血が噴き出した。

「大丈夫、死にはしない」

霊「な、何をしたのよ」

「過程を省略して結果を出しただけだ」

彼の能力は「省略する程度の能力」と「開いて閉じる程度の能力」

で種族は吸血鬼（no life king）であった。

「ルーミア行くか？」

ル「どこへ」

「俺のいた元の世界へ」

彼は父に「相手を見つけるまで帰って来るな」と言われ子供にされ異世界へ飛ばされた事を思い出した。

「一緒にそこへ行かないか」

ル「もちろんよ」

そして能力で元の世界へとつながる扉を開いた。

第三話

紫音が生まれた世界

「親父、約束通り帰って来た」

父「おお、帰ってきたか」

そしていきなりルーミアの胸を掴み揉んだ。

ル「ちよつといきなり何やってんのよ」

父「Dかなかないいい乳dグフォ」

「すまない親父は変態なんだよ」

ル「貴方はどうなの」

「どちらかというと母ちゃん似」

父「息子よ彼女の名は」

親父は何事も無かったかのように言った。

「ルーミアだよ」

父「ルーミアかいいい名前だ、息子をよろしく」

ル「(さっきから視線が胸に行ってるわね)」

数日後

結婚式が開かれた。そしてブーケトスした。掴んだのは・・・

？「(^^)おっ」

ル「誰・・・」

？「どうも執事長のナイト・ホライゾンです」

黒い髪で赤い瞳の執事だった。

その夜

「やるか」

ル「ええ」

そして1年後

ル「子供の名前決めた」

「ああ思いついた名前は

」

ル「ミアルト・完

第一話 舞編（前書き）

舞は東方紅夜変↗The scarlet night、東方紅夜
変↗The another worldの登場人物です。

第一話 舞編

俺は叢雲紫音^{むらくもしおん}14歳だ。家族は姉、父、母が居た。しかし俺はあまり好きではなかった。

事あるごとに両親に優秀な姉と比べられた。俺はそれが嫌で仕方なかった。

そしてある日 学校

「はあ」

？「どうした？ため息なんかついて」

そう聞いたのは山崎博^{やまざきひろし}俺の友人だ。

「姉と比べられるのに疲れた」

博「そうか」

「どうして俺なんかを産んだんだ」

？「おい叢雲」

「はあまたか」

博「この人定期的に決闘申し込んでくるNE！」

彼は赤山徹^{あかやまとおる}剣道部部长で定期的に決闘を申し込んでくる。

徹「今度こそ入部してもらうからな」

俺は習い事で剣道をやっているので部活をやる必要が無い。

そして体育館

徹「セイツ」

「毎回動きが単純なんだよ」

そして俺の竹刀が徹の胸当てに当たった。

徹「またか」

「じゃあな」

その帰り道

「いつ諦めるんだあいつ」

博「引退するまでじゃないか？」

別れて数分後

「何か見られてる気がするな」

その時足下にスキマが開いた。

「?（これは紫のスキマだと!夢だな）」

幻想郷

妖怪の山 天魔宅

?「誰か庭に倒れてる」

天魔 黒羽舞くろはねまいは庭で気絶していた紫音を見つけた。
舞「一様中に入れておきましょう」

数分後

「知らない天井だ」

目を覚ますと俺は和室にある布団で寝ていた。

舞「起きましたか」

そして背中に黒い羽を生やした黒い髪の美少女が俺を覗き込んでいた。

「ああ夢か」

舞「現実です」

でこピンされた痛ああああい

「あの、顔が近いんですが」

舞「あ、すみません」

「それより貴方は誰ですか?俺は叢雲紫音です」

舞「天魔の黒羽舞です」

「此処はどこですか」

舞「ここは幻想郷の妖怪の山ですけど?まさか外来人ですか?」

どうやら本当に幻想入りらしい。しかしこのキャラは知らないな。

舞「行くあてが無いなら住んでいいですよ」

「俺男ですよ」

舞「大丈夫です襲つたら引き裂きますから」
そして居候になったのであった。

第二話

俺は空いていた部屋で寝ることになった。

そして夢を見た。

最初は3年前のことだった。

母「どうして貴方は紗枝（姉の名前）と違って出来ないの！」

父「少しは紗枝を見習え！」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

そして去年剣道の県大会に優勝した時

「県大会優勝したよ！」

母「今忙しいのよ」

「・・・（チツ）」

全然関心を持ってくれなかった。

半年前

紗「お母さん、医大に合格したよ」

母「凄いじゃない！」

父「それに比べてお前は・・・」

「・・・」

姉のときは凄い褒めていた。

3日前全国大会の時

「3位だったよ」

母「今忙しいのよ、後にして」

「夕飯出来たら呼びに来て（畜生！）」

そして午前2時ぐらいに目が覚めた。

「ああああ何だよもう」

舞「どうしたんですか？魔されてましたけど」
舞が来た。

「起こしたかすまない」

舞「何か悪い夢でも見たんですか？」

「俺、生きてていいのか」

そして姉のことなどを話した。

舞「そうですか」

「誰も俺のことを褒めてくれない」

舞「そんなことありませんよ、そんなカスみたいな親の事なんて忘れたらどうですか？」

舞がそう言った。

「わかったもうそのことについて考えないよ」

舞「それが一番です

そして舞が出て行った。

その頃山のどこか

？「あの若造に山を任せられるか」

？2「ではどうしますか」

？3「クーデターを起こす準備が整いましたいつでもいけます」

？「いつも用意周到で助かるよ、君」

次の日

舞「今日は仕事が無いので山を案内します」

「分かった」

家をでてしばらく歩いていると、誰かが見ていた。

？「これは大スクープになりそうです」

舞「文さん、カメラを渡して下さい」

文「あやや、見つかってしまいました」

舞「Hurry！」

文「ス、スミマセンスグニワタシマス」

文は舞にビビってカメラを渡した。

舞「では行きましょうか」

「ここは、町？」

舞「天狗の町ですから」

？「おや、舞ちゃんそっちの奴は彼氏かい？」

誰かがそう言った。彼女は顔を赤くした。

舞「そ、そんなんじゃないありません！行くあてが無いようなので住まわせてるだけです！」

「そう見えるのか」

舞「・・・」

バシッ

そう言うのと叩かれた。

「痛あああい！！」

次は河童の住居区に行った。

そして河城と書かれた小屋があった。そして中から帽子を被った少女が出て来た。

に「あんたは天魔かい？それに人間が居る」

舞「外来人の叢雲紫音さんです」

に「私は河城にとり、よろしく」

「こちらこそ」

その後色々な場所を回った。

舞「ちよつと用事を思い出したので先に帰ります」

そして地図を渡して、飛んで行った。

「ピンクか」

50分後

ドガアアン

舞「何事ですか」

天狗「クーデターです」

その音は紫音の所まで聞こえた。

「あ、あそこは舞の家」
俺は急いで向かった。

黒羽邸

天「クツここまでか」

舞は能力を上手く使いこなせず、力も弱かったので苦戦した。

俺は家にたどり着いた。そこでは天狗達が戦っていた。俺は倒れていた天狗の刀を手に取り向かった。

舞「離してください」

天「殺すのが勿体ないな」

「舞」

俺は舞に近づく天狗達と戦っていた。しかし力の差は大きく追い詰められていき、右肩に槍が刺さり、右足を踏みつぶされ、腹を刺された。

「グハッゲボ」

舞「し、紫音さん！」

天「お前こいつが好きなら行っておく、こいつは子供が産めないんだよ、とんだ欠陥品だ」

衝撃の事実を知らされた。

舞「よくも彼を」

一瞬舞が消えて彼らの背後にたった。彼らは全員倒れた。

その時援軍が来てクーデターに参加した天狗達が捕まって行った。

「俺は役に立て・・・たか」

舞「しっかりして下さい！」

天「成功率は低いが一つだけある」

舞「教えて下さい」

天「それは人を辞めることになるがいいか少年？」

「やるよ、俺ゲホッ舞とずっと居たいし」

俺は意識を失った。

天「じゃあ始める」

そして何人かが集まり何か札を彼に貼り何かの呪文を唱え始めた。
そして彼の体が一瞬光った。

天「成功だ」

目を覚ますと昨日俺が寝た部屋で舞が近くに座っていた。

舞「起きましたか」

「舞」

そしていきなりキスされた。

舞「お礼です」

「お礼でそんなことしていいのか」

舞「あ、あと好きです」

「は？」

舞「貴方は命の恩人です」

「それだけで？」

？「私からもお願いします、舞を貰って下さい」

舞「お母さん！」

突然現れた舞の母がそう言った。

舞「こんな私を貰ってくださいか」

「もちろん」

今度は俺がキスした。

舞「これから一緒にです」

「ああ何があっても悲しませない」

そして二人は抱き合った。

母「ごゆっくり」

母は出て行った。

第三話

次の日の晩、博麗神社の宴会へ向かった。そして始めて空を飛んだ。そこには俺が知っているキャラが沢山いた。

霊「誰」

射「彼女は天魔様の黒羽舞です」

舞「貴方が今代の博麗の巫女ですか」

「俺は叢雲紫音」

射「あの、羽ありましたか？」

舞「人間から天狗になりました」

そして2時間後

「オエエエ」

舞「もう限界ですか」

俺は始めてにしては飲み過ぎたので気持ち悪くなった。

舞「しっかりして下さい」

そして帰ることになった。

「ああ真っ直ぐ飛べない」

舞「私に掴まって下さい」

家

俺は風呂に入っていた。

「やっぱりお風呂っていいな」

ガラッ

何と舞が入って来た。

舞「一緒に入っていますか」

「！」

そして俺の隣へ入って来た。あ、下があああバレたら不味いな。舞「どうしたんですか？そんな顔して」

「いや、何でもない」

舞「家族以外の女の人と入るの初めてですか」

「そうなるな」

あ、タオルが盛り上がって来た、うわああああ

舞「あの、その、大きいですね」

彼女は顔が真っ赤になっていた。ほわああああ

「俺、先上がるわ」

布団

「ん？」

舞「一緒に寝ましょう」

布団が二人用になっていた。

舞「寒いですから早く入りましょうか」

「あ、ああ」

舞「もうちょっと寄っていいですか」

「別に」

鼓動が速くなっていた。顔が近い

舞「そう言えば人間卒業したんですね」

「そうなるな」

舞「じゃあ童貞も卒業させてあげます」

「うわはなs」

そう言おうとするとキスされて言えなかった。彼女も結構酔っていたらしい

舞「では」

「くあせdrftgyふじこーp」

1年後

結婚式を挙げた。西洋風だった。そしてブーケトスをした。掴んだのは・・・

？「（ハハ）おっ此処はどこですか？」

全員「誰だお前！」

黒髪で赤い目の執事だった。その時空間が裂けて誰かが出て来た。

? 2 「おい、ナイト」

? 「あ、ご主人様」

? 2 「どうもすみません」

そして消えた。

舞「一体誰でしょうか」

「知るか」

夜

舞「紫音さん」

「何だ」

舞「愛してます」

「俺もだ」

月が二人を照らしていた。

(天魔ルート)・完

第一話 地底編

俺は幽月紫音^{ゆうげつ}、能力は「距離を操る程度の能力」と「相手を想うほど強くなる程度の能力」で種族は鬼。結構強さには自信があった。

しかし滅多に戦わないので地底ではあまり名前が知れ渡っていない。
「今日は買物でもするか」

俺は久しぶりに自炊することにした。

「お、ピンク」

帰り道に倒れている黒いセミロングの髪のコスロリとかいう服を着た少女を発見した。そして下着が丸見えだった。頭に角が生えていたので鬼だった。

「家に連れて行くか」

そして家に着いて数分後彼女は起きた。

？「此処はどこでしょうか」

「俺の家だ」

？「私は葛葉^{くさは}と言います、弱いけど鬼です」

「俺は幽月紫音、鬼だ」

葛「あの、今から食事作りますか」

「そうだが」

葛「では助けてくれたお礼に私が作ります」

「それは楽しみだ」

数十分後

葛「出来ました」

彼女の作った食事はとても美味しかった。

「そういえばどうして倒れていたんだ」

葛「話せば長くなりますが実は・・・」

分かったことは、彼女は監禁されていて毎日男達に犯されていたらしい。そしてやっと抜け出せたらしい。

「そうか」

葛「もう私は汚れてるんですよ」

「此処に住んでいいぞ」

葛「え、いいんですか」

「一人増えたぐらいどうでもいい、風呂沸いてるから先入れ」

葛「では入ってきます」

数分後

「しかし、俺の凄いタイプだなあいつ、料理も上手そうだし」

そして上がって来た。

葛「蓋開いたままなのですぐ入って下さい」

「分かった」

今地底では誰かが地底の情報を地上に漏らしているのが問題になっていた。その正体は葛葉を監禁していた奴らだった。

？「あの小娘に全て着せるか」

？2「それが一番手っ取り早い」

何処かで彼らが話していた。

「すまん、布団1つしかないだが」

葛「え、伸びた？」

俺は能力で布団を伸ばした。

「能力だ」

葛「凄いですね」

そして布団に入った。

葛「男の人にこんな優しくして貰ったのは始めてです」

「そうか」

俺はこれから彼女を守って行きたいと思った。

第二話

朝

「ん、居ない」

葛葉が布団から出ていた。

葛「朝ご飯出来ましたよ」

「お、作ってくれたのか」

彼女は朝食を作ってくれた。

食事中

「お前はいいお嫁さんになれそうだ」

俺はそう言っていると彼女が水を吹いたあところ言った。

葛「ボフツいきなり何言い出すんですか！」

二時間後

誰かが来た。

？「おい居るか」

戸を開けると何人かの鬼がいた。

「居るよ」

？「こいつを探してるんだ」

そして写真を見せた。何と葛葉だった。

「こいつがどうした」

？「それがこいつが地上に情報を漏らした奴らしい」

そんな馬鹿な。

「知らないな」

その時葛葉が来た。最悪のタイミングだ。

葛「どうしたんですか」

？「こいつだ」

「葛葉、逃げるぞ」

葛「え」

俺は葛葉をお姫様抱っこして秘密の抜け道を通って外へ出た。
数分後 町の外れ

「お前が此処の情報を漏らした犯人だと思われる」

葛「私は違います、そんなことする勇氣なんてありません」

「そうか」

葛「疑わないんですか」

「俺はお前を信じている」

？「見つけたぞ」

見つかったらしい

「逃げるか」

別の場所

？「上手くいったな」

？2「そうだな」

？3「あんた達かい情報を漏らしてたのは」

？「お、お前は星熊勇義」

勇「逃がさないよ」

妖怪達「おい碎雅さんが来た」

彼はこの一帯で一番強い鬼だった。そうだ、作ってから使っていない
スペルカードとかやらを使う

碎「おい悪いことは言わない、そいつを渡せ、お前らは離れて見て
いろ」

「葛葉、下がってきてくれ」炎の獣「」

そして俺はスペルカードを使った。すると体が変化した。こんな

感じ <http://www.1999.co.jp/itbig1>

6/10166761b.jpg

葛「・・・どうしてこうなった」

「ガアアア（喋れない）」

そして碎雅が殴ろうと突っ込んで来た。そして俺の拳とぶつかった。かなりの衝撃波が発生した。

見ていた妖怪達が吹き飛んだ。

碎「何、指の骨が折れただと（あいつら離れてろって言ったのにな）」

「（ん、この尻尾使えるな）」

俺は巨大な尻尾を振りまわし彼に攻撃した。しかし受け止められた。碎「そおれ」

尻尾を掴まれた俺は投げ飛ばされたが、空を飛べたらしく宙に浮いていた。

「（口から火が出るかな）」

その時彼がジャンプしてパンチしようとした。俺は彼の腕を掴み強く握った。

碎「グッ」

そしてミシッといって潰れた。

「グガアアア」

俺は彼を全力で殴った。彼は吹っ飛んだ。

？「そこまでだ」

そう言ったのは勇義だった。彼女の近くには縄で縛られた5人の男が居た

妖怪「勇義さんどうしたいきなり」

勇「真犯人見つけたんだよ、こいつらが全部白状した」

「それは良かった（変身が解けた）」

碎「もうだめぽ」

「帰るか」

葛「はい」

夕食後

「俺はお前が好きだ」

俺はさりげなく告白した。

葛「え、前にも言ったように私はもう汚れきってます、あと事故で子供が産めなくなりましたそれでもいいんですか」

「大丈夫だお前はいい奴だ」

葛「そうですか、嬉しいです」

そしてこれからずっと一緒に暮らすことになった。

（完）

第一話 アリシア編（前書き）

アリシアは東方狂鬼伝の登場人物と全然設定が違います。

第一話 アリシア編

約千年前

俺は時雨紫音、大昔（月人が移住する前）から生きて来た妖怪（天魔）で能力は「不可能を可能にする程度の能力」だった。

そして俺はヨーロッパに来ていた。そしてある村に来ていた。そこは壊滅状態で家が燃えていた。

「うわ熱い」

？「誰か助けてええ！」

「ん、悲鳴だ行ってみよう」

そして悲鳴のする方へいくと赤い服を着た背中に黒い羽根を生やしたセミロングの黒髪の女性が5人の男に捕まっていた。多分吸血鬼か。

男「大人しくしろ！劣等種」

？「痛い」

彼はそう言って彼女の頭を踏んだ。

「（その羽は天狗？）」

男2「俺らが一生可愛がってやるからありがたく思え」

？「い、嫌」

「君達、ちよつといいか」

男「何だお前」

「君達の方がもつと下種だな」

男「なんだ死にたいのか貴様」

「死ぬのは君達の方だ」

そして俺は銀で作った杭を5本創り彼らの胸を貫いた。彼らは灰になつて死んだ。

「怪我は無いか」

？「はい大丈夫です、貴方は誰ですか」

「俺は時雨紫音、君は」

？「私はアリシア・クロミヤで、天狗と吸血鬼のハーフです」

え黒宮？あの山を追い出された天狗の名字じゃないか。まさか

「親の名前は」

ア「母がローズ・ブラッドで父が黒宮疾風くろみやはやてですが」

そうか出行った後吸血鬼と作ったのか。

「どうしてこの村は襲われた」

ア「実は・・・」

彼女によるとこの村は半吸血鬼が暮らしていて、純血主義の吸血鬼達に襲われたらしい。

そして彼女が逃げ遅れてさっきみたいなことになったらしい。

「行くあて無いなら俺と来るか」

ア「では着いて行きます、ちよつと待ってて下さい」

そして彼女が壊れた家の中から日本刀を持ってきた。

「それは」

ア「父から貰った剣です名前は「ブルー・レイヴン」です」

そして刀身の色は少し青かった。

「じゃあ俺の生まれた国へ行く」

そして瞬間移動した。

ア「え？」

「着いたぞ俺の家だ」

そして入って行った。

ア「何年放置してましたか」

久しぶりに帰って来たのでボロボロだった。

「えつと20年くらいかな、でもこうすれば」

俺は能力を使い一瞬で綺麗になった。

ア「早っ」

その夜

「アッー布団どうしょー」

ア「別に一緒に寝ていいですが」

「いいのか、出会ってすぐの奴と」

ア「紫音さんは襲わないと信じてますから」

1時間後

「（寝れるかああああ）」

ア「zzzz」

彼女が寄って来た。顔が近いな、しかし凄い美人。
そして全然眠れなかった。

？視点

彼が帰って来た。もう一人いたが雑魚だった。あんな奴が彼のパートナー？

私は彼を式にすることにした。

第二話

数日後

買い物へ行くことにした。

ア「先に外に出てます」

そしてしばらくして外から物音と叫び声が聞えた。

「一体なんだ」

ア「・・・」

戸を開けると満身創痍のアリシアが倒れていた。右の羽が無かった。そして近くに八雲とかいう妖怪が居た。そしてこう言った。

紫「貴方私の式にならない」

「ははははは、雑魚が何をほざいている」

紫「雑魚？馬鹿にしてるの、嫌なら力づくで（力は上の筈）」

「遅いな」

その時彼女の全身から血が噴き出した。

紫「何を」

「面倒だから省略した」

俺は隠してた妖力を全て出した。彼女の数百倍くらいだった。

紫「何よこれ動けない」

「じゃあさようなら」

俺は彼女を遠くに瞬間移動させた。

そしてアリシアの傷を治した。

ア「し、紫音さん」

「ごめんな」

ア「紫音さんは悪くありませんよ」

その後彼女を鍛えた。そして「速さを操る程度の能力」が目覚めた。

結界が出来た直後

「此処が幻想郷か」

今はアリシアとお互い好き同士になっていた。

紫「久しぶりね」

俺は幻想郷へやって来た。そして八雲が出て来た。

「何の用だ」

紫「もう式神にする気は無いわ、ようこそ幻想郷へ」

紫視点

彼は近い将来博麗の巫女じゃ太刀打ちできないような異変が起きた時に使えそうだな。全ては幻想郷の為。

視点切替

八雲がふざけたことを考えているが気にしない。

数日後

誰かが来た。

？「おお、アリシア」

ア「お父さん？それにお母さんも」

彼女の両親が来た。

疾「お前は時雨だったけ」

「帰って来たのか」

口「娘をよろしくお願いします」

そして帰って行った。

現代

ア「私の始めてを貰ってくださいますか」

彼女はいきなりそう言った。

「もちろんってええええええ！」

ア「では」

「ギアアアアア」

そして生まれて始めて「ピー」をした。

（完）

第一話 セレナ編（前書き）

セレナは東方紅夜変 The another world の登場人物です。

第一話 セレナ編

俺は東紫音^{あずましおん}で歳は19歳、1年前に幻想郷へやって来た。そして来た時に「ありとあらゆる物事を書き換える程度の能力」という能力が目覚めた。

そして彼は博麗神社で暮らしているうちに博麗の巫女霊夢に好意を寄せられていた。しかし彼はまだ分かっていない。

今日、俺は妖怪の山へ来た。

柊「久しぶりですね」

「あ、柊」

その後にとりの家へ寄った後、弱っている体毛が銀色の狼を見つけた。

「おい、これ食うか」

狼「ガア」

俺は近くに落ちていた木の実をあげた。狼は警戒して居なかった。

狼「ガアガア」

「もつといるのか」

そしてもう少し持つて行った。

その後

「じゃあな」

しばらくして俺は斜面で足を滑らして落ちて行った。そして意識が途絶えた。

？「大丈夫？」

そして誰かが彼を発見して担いで行った。

俺は夢で外の世界のことを思い出した。

俺は2年前痴漢と疑われたことがあった。

「だから知らないって」

男「往生際が悪いぞ！」

近くに居た男性がそういった。周りの人達もボソボソと話していた
駅員「ちよつと来てもらえる」

すぐに無実だと分かったがあの時の周囲の人達の俺を見る目が怖かった。

「！此処は」

？「zzzz」

目覚めると何処かの小屋の中で椀と同じような耳と尻尾を生やした
金髪のセミロングの女性が俺の腹を枕にして眠っていた。

「あの、すみません（ヤヴァイ超美人）」

？「ふぁ、起きましたか」

「あの誰ですか」

？「私はセレナ・フェンリル、さつき貴方が助けた狼」

「え、さつきの狼」

セ「それで名前は」

「東紫音」

セ「先程は助けていただきありがとうございます」
そして抱きしめられた。胸で窒息しかけた。

「ああ死ぬかと思った」

セ「あ、強くしすぎましたか」

「こつちこそありがとうございました、ではこれで」

セ「怪我大丈夫ですか」

「大丈夫すぐ治すから」

そして俺は「傷が無くなった」と書き換えて治した。凄くチートだ。セ「何したんですか」

「能力で治した」

セ「どんな能力ですか、私は「炎を創造し操る程度の能力」です」

「「ありとあらゆる物事を書き換える程度の能力」だけど」

セ「よく分かりませんが凄そうですね」

「じゃあ今度お礼しに来ます」

セ「じゃあ、友達になりませんか」

「それだけでいいのか」

セ「はい、それで充分です」

「じゃあまた会おう」

そして神社へ帰った。

霊「今日は早かったわね、夕飯出来てるから早く来なさい」

そして俺は中へ入って行った。

第二話（前書き）

第二話

その後紫音は何度も彼女の家へ行った。彼女は彼に惹かれていった。

セ「貴方と出会えて本当に良かった」

彼女が何か言ったが聞き取れなかった。

「え？」

セ「何でもないです」

「そうか（気になるな）」

セ「あの、お酒飲めますか」

セレナが酒を持ってきた。宴会で始めて飲んだ時酔い潰れたっけな。

「別に大丈夫だけど」

セ「じゃあ飲みましょ」

彼女は間違えていつも飲むものより度数が高い物を持ってきてしまったので短時間で酔ってしまった。

セ「暑い」

そして彼女はいきなり上の服を脱いだ。下は黒いブラだった。え、

エロイ

「ちよつと大丈夫か？（谷間が・・・）」

セ「私紫音さんが欲しくてたまりません」

そしてそのまま押し倒されてキスされたが彼女は倒れてしまいそのまま俺の上で寝てしまった。

「重っヤバい下が・・・」

俺は胸がドキドキしてきた。顔が近いな

「あ、能力使えばいいんだ」

俺は「自分が力持ち」と書き換え彼女を敷いてあった布団へ入れた。
1時間後

セ「？」

「あ、起きた」

セ「さ、さつきはすみません、あんなことしてしまって」
「じゃあ帰るわ」

博麗神社

「ただいま」

霊「毎日何処行ってるの」

「別に友達の家」

霊「そう（今度着いて行こうか）」

妖怪の山

？「明日決行だ」

上層部の天狗達が何か話していた。そして机には何とセレナの写真があつた。

第三話

翌日

「じゃあ行ってくる」

霊夢は彼を尾行した。

「セレナさん、居ますか」

セ「紫音さん」

霊「（誰、あの女）」

セ「あの、私のことどう思ってますか」

「どうって？」

セ「異性としてです」

難しいこと言うなあ

「綺麗で優しい奴だと思うよ」

セ「では私のこと好きですか」

「友達としてか」

セ「私は貴方のこと好きです」

「は、何言ってるんだ」

彼女はいきなりキスした。

霊夢は窓から見ていた。

霊「（あいつよくも紫音を誑かしたわね）」

「俺なんかでいいのか」

セ「はい、全然構いません」

「じゃあ、俺でいいなら」

セ「明日、この山であるお祭りに行きませんか」
「じゃあ、また明日」

そして彼が帰った後

霊夢が彼女の家の扉を蹴り破って入って来た。

セ「明日が楽しみです」

？「貴方には明日は来ないわ永遠に」

セ「貴方は博麗の巫女？」

霊「よくも紫音を誑かしたわね」

そして御札や弾幕を浴びせた。

セ「何ですかいきなり」

霊「大人しく退治されなさい」

彼女は御札を燃やしたが何枚か貼り付いた。

セ「ああああ」

霊「どう私の特製の御札の味は」

セ「の、能力が封じられた」

霊「言い残すことはそれだけ」

彼女はうつぶせで倒れているセレナの頭を踏みつけた。

セ「う、ぐ」

霊「どうやって殺そうかしら」

彼女は針を彼女の右目に突き刺した。

セ「嫌あああ」

俺は霊夢がくれたお守りを忘れたことに気付き取りに戻っていた。

「もうすぐだな」

そして俺は霊夢に踏まれている彼女を見つけた。

霊「え、紫音」

「何やってるんだ霊夢」

霊夢が少し止まった隙を狙いセレナが彼の脚に抱きついた。

セ「紫音さん」

「何やってるかって聞いてるんだ」

彼は冷たいまなざしを彼女に向けた。

「この前作ったスペルカードを使うか災符「パンドラの箱」」

すると紫音の身長と同じ位の黒い立方体が現れ、その蓋がが開くと、大量の赤黒い弾幕が高速で飛び散った。

光弾は彼女に少しかすめた。

霊「夢想封印」

しかし発動しなかった。

霊「あれ」

「この弾幕に触れた奴はスペル発動中不幸になるんだよ」

霊「弾幕が当たらない」

彼女が撃った弾幕は全て彼からそれていた。

「無駄だよ」

数秒後終わった。

霊「邪魔しないでよ」

「どうしてこんなことする」

霊「あんな妖怪のどこが いいのよ」

俺はこの言葉にかなり怒った。

「黙れ、模倣「マスタースパーク」」

そして太い光線が出た。魔理沙とは違い赤黒かった。

このスペルは自分が今まで見たスペルカードを真似することが出来た。

霊「それは魔理沙の」

「セレナ、離れて模倣「幻想風摩」」

セ「はい」

俺は高速で動き弾幕をまき散らした。弾は同じく赤黒かった。

霊「文よりは弱いわね霊符「夢想封印」」

そして大量の弾幕が俺を追尾した。

セ「やつと御札はがれた炎盾「ファイアシールド」」

その時炎の壁が弾幕を防いだ。

「セレナ？」

セ「早く次の攻撃を」

「融合「フォースオブアカインド」+夢想封印」

このスペルは自分が今まで見たスペルカードを融合させることが出来た。

そして俺が四人になりそれぞれが夢想封印を放った。

霊「何これこうなったら「夢想天生」」

そして俺の弾幕がかき消されていった。そして俺は飲み込まれた。

セ「紫音さん！」

霊「軽々しくその名前を呼ばないで」

彼女はセレナを能力を封じる特殊な糸で縛って木に逆さ吊りにした。

セ「きゃあ」

そして太腿、胸、二の腕に針を刺した。

セ「痛い嫌」

霊「へえ白」

そして彼女は彼女の股に針を刺した。そして血が染み出て白い下着が真っ赤に染まった。

セ「嫌ああああ」

霊「大人しくしなさい」

気付くと俺は倒れていた。

「畜生！動けない」

もう人間辞めるか、彼女を助けられるならどうでもいい。そして俺は種族を妖怪にした。

「いい加減にしるおおおお」

霊「？」

俺は彼女を殴り飛ばした。

霊「何すんのよ」

「誑かしたって本気で思ってるのか」

霊「・・・」

「俺のこと好きか？」

彼女は頷いた。俺は彼女の好意を消した。

セ「あつ」

「？」

天狗達がセレナを落とした。

？「やれ」

「止めるおおお」

？「何だお前は」

「何してる」

？「こいつは幻想郷で大暴れした妖怪アグニ・フェンリルの娘だ」

「それがどうした」

セ「離して」

？「此処で禍の種を消す」

そして一人の天狗が彼女を押さえ、もう一人が斧を構えた。

「止める」

その瞬間斧を持っていた天狗を殴り、彼女を担いで離れた。

セ「紫音さんまさか妖怪に」

「大丈夫か」

俺は彼女の傷を治した。

「逃げるぞ」

霊「誰か来たわよ」

そこには髪が黒いセミロングの少女と天狗が沢山いた。

？「舞様？」

舞「彼女は彼と違い悪い奴ではありません」

天狗「大人しくしろ」

そして彼らを捕まえて連行した。

霊「じゃあさよなら」

「今までありがとうな」

そして彼女は帰って行った。

セ「帰りましょう」

「そうだな」

その後壊れた家を修理した。

その夜

セレナが先に寝た。俺は一人でポテチを食べていた。

「ハックシヨン」

そしてくしゃみをした瞬間手に持っていたポテチが何処かへ飛んで行った。

「どこだ」

そして見つけた場所は彼女の胸のあたりだった。

「バレたらヤバいな」

そして取るうとした瞬間彼女に手を掴まれた。

セ「ふあ何寝込みを襲おうとしてるんですか」
目を覚ましそう言った。

「ご、誤解だ」

セ「やるなら言っ下さいよ」
「は」

そして彼女に布団中へ引き込まれた。

セ「始めてですから緊張します」

「えギヤアアア」

そしてそのまま性的な意味で食べられた。

(完)

第三話（後書き）

アグニフェンリル

昔、妻のフェレスが人間に輪姦され殺されかけたので激昂し大暴れした。最後は彼女の腕の中で死んだ。

第一話 舞編2

俺は叢雲紫音、妖怪の山に住む天狗で天魔の黒羽舞の許婚だった。
兄の久音は彼女の親衛隊の隊長だった。そして犬走椋の彼氏だった。

いよいよ来週結婚式だった。

夜

舞「いよいよ来週ですね」

「そんなに楽しみか」

寝る部屋は同じだったが布団が別々に分かれていた。

山の何処か

？「クーデターの準備が整いました」

？2「いよいよですね雨宮様」

？3「許婚の目の前で輪姦して殺すのが楽しみだ」

？「柊！こんな時に下品なことを言っな」

雨「では明日決行だ」

翌日俺は妖怪の山を散歩しに行った。

黒羽邸

久「何なんだこいつら」

天狗達が舞の家へ攻め込もうとしていた。久音達親衛隊は彼らの相手をした。

「攻めろ」

隊員「突破されました」

久「紫音の奴何してるんだ、おいそこの文屋弟を呼べ」

彼は上空に居た射命丸にそう言った。

文「は、はい（あんな真剣な久音さん初めてです）」
彼女は大きく彼を探した。

その頃の紫音

「何だ大きくて皆」

白狼天狗や他の天狗が大きくて何処かへ向かっていた。その時文が来た。

「おい、文何の騒ぎだ」

文「クーデターが起きました、舞様が危ないです」

「何だって」

俺は大きくて飛んで行った。

黒羽邸

物音を聞いた舞は外へ出た。

舞「こ、これは一体」

？「見つけた、押さえとけ」

舞「きゃ、離して」

？2「ボソツ（後でお楽しみだハハハ）」

「クツどこだ」

俺は天狗の集団と戦っていた。

男「よそ見るな」

「ンヴォ！」

その時腹を蹴られた。

「邪魔だああ」

しかし俺は何とかこらえ彼を斬った。

「舞！」

舞「紫音さん」

雨「今だやれ」

その時天狗達が俺を押さ付けた。この人数じゃ無理だ。

舞「な、何を」

?「じゃあ見とけ愛する者が犯され死ぬ瞬間を」

舞「い、嫌」

そして舞の服を脱がそうとした。

「止めるお」

その時俺は奴らから抜け出し舞の元へ駆け寄った。

「あがあ」

舞「嫌ああああ」

その時彼の背中に十本ぐらい矢が刺さり近くに居た奴の槍が刺さった。

「こんな所で」

舞「そんな嫌」

その時彼女の周りの天狗が跪いた。

?「何、体が重い」

彼女の能力が目覚めた。能力は「重さを操る程度の能力」と「速さを操る程度の能力」だった。

そして彼女が高速で動き彼らを殴って行った。

?「ぐあああああ」

?2「ギヤアアアア」

?3「イ`エアア」

?4「ひぎいい」

?5「一体何が」

殴られた彼らはそれぞれ殴られた箇所を押さえ倒れていた。

舞「許しませんよ」

雨「ひ、ひい」

彼女は彼の頭を掴み空高く飛び彼を地面に叩きつけその後猛スピードで落下して彼を殴った。

雨「あ、ギヤアアアア」

落ちた部分が直径3メートルのクレーターになっていた。

久「お前ら観念しろ」

久音ら親衛隊は殆どの敵を倒した。

「兄ちゃん」

久「舞よける」

舞「え」

その時一本の矢が彼女の腹に刺さった。

「舞い！」

久「自分の心配しろ」

彼は紫音を気絶させた。

久「山野は彼女を俺はこいつを連れて行く」
そして病院へ連れて行った。

第二話

数日後

舞「紫音さん」

舞が彼の病室に來た。彼女は若干表情が暗かった。

「俺はちゃんと生きてるぞ、今日で退院出来るらしい」

舞「そうじゃありません」

「どうした」

舞「この前私矢が刺さりましたよね」

「それで」

舞「その後医者に言われました」

「何て」

舞「子供が産めないって」

「え？」

舞「じゃあさよなら」

彼女は走って行った。俺は後を追いかけた。彼女は崖に立っていた。

舞「来ないでください」

「死ぬな」

舞「来ると落ちますよ」

そして彼女は崖から飛び降りた。

「舞！」

舞「（さよなら紫音さん）」

俺も飛び降りたそして舞を抱きかかえた。

舞「え、どうして」

「大事な奴だから当然だろ」

舞「でも私」

「言っなあああ」

そして彼女にキスした。

舞「！」

「それでも舞が好きだ」

舞「紫音さん」

「帰ろう」

舞「はい」

そして何とか踏みとどまった。

家

兄が玄関へ来た。

久「お偉いさんが来て「欠陥品は要らない、山から追放だ」って言われた」

「それって」

まるで舞が道具みたいな言い方だ。腹立つな。

舞「天魔の地位を剥奪ですか」

久「俺にやれと言われた、舞ちゃんは追放だってさ、この前の戦いで危険だと判断された」

舞「そんな紫音さんと離れたくありません」

「俺は」

久「お咎めなしだ、俺の補佐にしようとしてる」

「じゃあ舞と出て行くよ」

久「じゃあ行け、また会おうな」

舞「どこに行くんですか」

久「山の入り口らへんに別荘があった筈だ、そこを使え」

そして鍵を渡した。

「じゃあ行くか」

舞「はい、何処までもついて行きますよ」

久「お前らが一日も早く帰って来れるよう頑張るよ」

そして山を下りて行った。後日文々。新聞に『天魔の黒羽舞とその許婚失踪か?』と書かれた。

数日後

舞「夕飯出来ました」

「美味しそうだな」

窓から久音が見ていた。

久「（上手くやれてるようだ）」

（舞編 2・完）

第一話 地底編2（前書き）

東方紅夜変 } The another worldと同じ世界です。

第一話 地底編2

俺は鬼の幽月紫音、結構強いが全く名が知れていない。能力は「ありとあらゆるものを防ぐ程度の能力」だった。

俺はよく行っている赤羽亭という店で食事した。

「いつも美味しいな」

経営しているのは赤い羽根の妖怪の赤羽緋天と雪女の南雲美雪だった。

美「美味しくできるのはこれだけですけどね」

緋「ちよっとそれ結構気づくなあ」

「お、白」

金を払い店から出た後、路地裏に髪が白いセミロングで脚の部分の丈が膝の少し上ぐらいの赤い浴衣を着た鬼の少女が倒れていた。ちなみに角は側頭部に生えていて右に赤いリボンがしてあった。そして丁度俺の位置から下着が見えていた。

「おい、大丈夫か」

？「・・・」

俺は家に連れて行くことにした。ヤバい凄く可愛い、誰だ酷い目にあわせた奴は。

数時間後

？「此処は」

「ああやつと起きたか」

彼女は眼の色が左右で違っていた。右が黒で左が赤だった。

？「貴方は一体」

「俺は幽月紫音だ、此処は俺の家だ」

？「私は葛葉と言います」

「で、どうして倒れてた」

葛「離せば長いですが・・・」

少女説明中・・・・・・・・

彼女の話によると髪と目の色が原因で親に遊郭に売られて、数日前引き取られた先から捨てられたらしい。

「どこだそこ教える、捨てた奴殺ってくるククク」

葛「落ち着いて下さい、って殺気が凄いです」

「ああ、悪かった」

葛「あの何かお礼をします」

「じゃあ夕飯作ってくれるか材料あるし」

葛「分かりました」

少女料理中・・・・・・・・

葛「どうですか」

作ったのは筑前煮と茸の入った味噌汁とご飯だった。まず筑前煮から食った。

「こ、これは」

葛「ゴクリ」

「美味あああああい！」

俺は叫んだ。その後隣の木口爺さんが来た。

木「五月蠅あああい、そんな美味いならわしに一口くれ」

「はい」

彼も食った。

木「美味あああい！」

葛「そんなに美味しかったですか」

木「じゃあ」

そして帰って行った。

葛「褒めて貰ったの初めてです」

「そうだったのか」

夜

「ギアア布団一つだあああ」

葛「一緒でもいいですけど」

「はい？会って1日もしない俺と大丈夫か」

葛「これもお礼です」

「もつと自分を大事にしるよ」

俺はデコピンした。

葛「！」

「じゃあ寝ようか」

次の日

葛「では、買い物へ行ってきます」

「気を付けるよ」

そして数時間後帰って来ないので探すことにした。

「おかしいな」

そして戸を開けると彼女の赤いリボンが落ちていた。

「まさか」

俺は付いて行けばと後悔した。

第二話

？

葛「此処は」

気絶させられていた彼女が目を覚ますと薄暗い部屋で首と手足に鎖が付いていた。

？「起きたか」

葛「誰」

部屋には三人の鬼が居た。

鬼「早速始めようか」

葛「ま、まさか」

鬼2「では親分が先に」

葛「や、止めてきゃああああ」

数分後

鬼「初めてか」

葛「嫌ああああ痛い止めて」

その後残りの二人にも犯された。

葛「・・・うつ」

彼女は彼らが出て行ったあと静かに泣いた。

その後俺は葛葉の妖気の跡を辿っていた。そして少し町から離れた廃屋に行きついた。

「此処か」

中に入ると地下へと続く階段があった。そして幾つか部屋があった。「誰か居るか」

俺は鍵を壊しドアを開けた。中には鎖に繋がれた少女が居た。

「監禁されてるのか」

そして枷を壊して外した。

？「あ、ありがとうございます、他にも何人かいます」

そして彼女を連れて部屋を開けて行った。

そして五番目の部屋

？「もう嫌あ」

鬼「黙れ」

鬼が少女を押し倒そうとしていた。

「お前それでも誇り高き鬼かあ？恥を知れ！」

鬼「グハア」

俺は彼の腹を思い切り殴った。

「大丈夫か」

？「はい」

そして最後の部屋

葛葉が居た。そして7人鬼がいた。

葛「紫音さん？」

鬼「はあ誰だ」

鬼2「紫音？聞いたこと無いな」

「お前ら覚悟しろよ」

葛「（凄い殺気）」

鬼「どうせ無名の雑魚だよっちまえ」

「やれるもんならな」

そしてその中の誰かが俺を殴った。

「はあ？」

鬼「ぜ、全力でやったはずだゲボア」

今度は俺が殴った。彼は気を失った。

「こんなものか」

鬼「に、逃げろ」

そして全員一目散に逃げに行った。その後彼らの悲鳴が聞こえた。

鬼「ゆ、勇義の姉さん」

勇「お前らか連続誘拐事件の犯人は、お前ら連れて行け」

地下

葛葉以外の少女達は出て行った。

葛「どうして私なんかを助けに」

「だから自分を卑下するな」

葛「へ？」

俺は彼女を抱きしめた。

「俺はお前が好きだ、一目惚れだ」

葛「でも私彼らに汚されましたし、生まれつき子供が産めません」

「気にするな」

葛「私なんかでいいんですか」

「しつこいな」

葛「！」

俺は彼女にキスをした。柔らかい唇だった。

葛「もういいです一緒に居てあげますよ、浮気したら許しませんから」

「じゃあ帰ろう」

（地底編2・完）

地底編3（前書き）

今回は葛葉ではありません。

地底編3

俺は橘紫苑^{たちばな}、鬼だけど鬼という事を昔した封印で隠している。そして橘は偽名で本名は行方不明になった、四天王を凌ぐ強さを誇った、幽月紫音が本名である。能力は「重さを操る程度の能力」と「硬さを操る程度の能力」の二つを持っていた。

？

男「桜花^{おうか}、今回の標的はこいつだ」

ある妖怪の男が見た目が10代後半の脚の丈が膝ぐらいの黒い着物を着た髪が桜色のセミロングの少女に写真を見せた。

桜「分かりました」

彼女は刀の付喪神だった。

男「失敗したらどうなるか分かってるな」

彼らは殺し屋でさっきの少女に暗殺をやらしていた。そして失敗したら殴られたり犯されるなどの酷い目に遭っていた。

桜「あの妖怪」

彼女が殺す相手は何と紫音だった。そして彼女は寝ている紫音に近寄り刀身が桜色の日本刀を出した。

桜「（すみません）」

「（殺気？）」

彼女は刀を首元に振り下ろした。しかし彼は刀身を掴んだ。

「何してるんだ」

桜「え！」

「あらまあなんと凄い綺麗な人なんでしょう、惚れてしまいました」

桜「へ？（き、綺麗だなんてそんな）」

「殺しに来たのか」

桜「でも殺さないと・・・」

よく見ると彼女の脚にあざがあつた。

「おい見せてみる」

桜「え」

俺は彼女の服の袖をまくって腕を見た。そこにもあざがあった。
「なるほど、殺さないところなるのか」

桜「もう焼くなり煮るなり好きにして下さい」

彼女はそう言った。

「名前は、俺は橘紫苑」

桜「お、桜花です」

「じゃあ桜花、行くあてが無いだろ、此処で暮らしてもいい」
そして俺は再び寝た。

桜「（今度こそ）」

数分後彼女は再び殺そうとした。

「ん」

桜「あつ」

彼は彼女の刀を掴んで奪い奥に投げ彼女を布団に引きこんだ。

「んゝ温い」

桜「え、ちよつと」

そして彼女は襲われないかヒヤヒヤしながら眠りに就いた。

翌朝

桜「お、襲われてない」

彼女は布団をめくりそう言った。

「zzzz」

俺が起きると彼女は居なかった。そして紙が置いてあった。

「ん、何々」

それには「貴方に迷惑をかけたくないので出て行きます」と書いてあった。

「どこ行きやがった」

俺は適当に人通りが少ない場所を探した。

男「最近強姦事件が多いとか言ってるな」

男2「物騒だな」

二人の男がそんなことを言っていた。

「（あいつ大丈夫かな）」

数分後

鬼「どうするんだ死んでるんじゃないか」

鬼2「埋めちまえ」

3人の鬼うち2人が話していた、近くには少女が倒れていた。目は虚ろで服には白い液体が付いていた。そしてよく見ると桜花だった。

「お前らか強姦事件の犯人は」

そして俺は鬼の力を封印していた、銅の腕輪を外した。そして能力を使い彼らにかかる重力を増やした。彼らは地面に膝をつき動けなくなった。

鬼「お、重い」

「元に戻すからかかって来い」

俺は妖力を6割隠していた。

鬼「てめえ舐めやがって3対1でこっちの方が有利だぞ」

「まずはお前か」

俺は1人目を拳を硬くして殴った。

鬼「ウボア」

彼は気絶した。

鬼2「畜生！」

「2人目」

二人目は頭突きをした。

鬼2「ギャアア痛い」

そして頭を押さえ気絶した。

鬼3「ひ、ひい」

3人目は逃げようとした。

「それでも鬼か」

俺は地面を硬くして背負い投げをした。

鬼3「え、うわあああ」

彼も二人と同じく気を失った。

「桜花！（よかった、まだ生きてる）」

？「やつと見つけた」

「お前は」

7人の鬼と妖怪の男が来た。

？「お前を殺すようにこの出来損ないに命じた奴さ」

？2「そいつと一緒に死んでもらう」

「死ぬだつてえ？何言ってるんだ？雑魚共が」

？「お前らやるぞ」

そして妖力を全快にした。

？「何だこれは」

「みなさんおやすみ」

そして怯んで動けない彼らを殴って気絶させていった。

？3「何が起きてるんだ」

その後紫音の妖力を感じ取った四天王の星熊勇義と他の鬼が来た。

「そこの3人が強姦事件の犯人だ、そこの7人は殺し屋だ」

勇「お、お前は幽月」

「この姿で会うのは久しぶりだな勇義」

勇「この娘はまさか2年前に行方不明になっていた桜花」

「こいつらに使われていた」

勇「じゃあ連れて行く」

その後知り合いの鍛冶師の家を訪れた。

？「何の用だ」

「この刀知らねえか」

俺は桜花の剣を見せた。

？「これは昔わしが作った桜花」

「こいつはその剣の付喪神だ」

？「そうか、そいつはお前にやる、幸せにしてやれ」

桜「私なんかでいいんですか」

「もちろんお前が大好きだ」

桜「もし浮気したら「ぴー」斬りますよ」

目が笑っていなかった。

「おお、怖い怖い、じゃあな」

（地底編3・完）

第一話 空狐編

俺は昔人間だった。その時の名前は黒木齊蔵くろきさいぞうである村の村長だった。歳は23歳で1歳年下の弟宗蔵しゅうぞうが居た。そして10年前妖怪に母と祖母を殺され妖怪を強く恨んでいた。

しかしある日

山菜を取りに行った帰りに狐の妖獣に出会った。俺はすぐ腰に差している白い刀身の刀白鷺しやくろを抜いた。

「妖怪め退治してやる」

その時狐が光り、金色で腰ぐらいの長さの髪の毛の白い着物を着た青い目の女性になった。頭には金色の狐の耳があった。

？「名前は何かしら私は魅音みおん」

「黙れ」

俺は刀を振った。しかし素手で受け止められ刀を奪われた。

魅「そんなんじゃ無理よ」

彼女に脚を払われ転倒した。しかし彼女は殺そうとしなかった。

「どうして殺さない」

魅「貴方が勝手にやってきただけでしょ」

「黙れ妖怪」

魅「貴方、素質があるわね、鍛えてあげるわ」

「？」

そして数時間後

「また頼む」

魅「憎いんじゃないの」

「もつと強くなるそしてお前を倒す」

魅「楽しみね、それとこれ」

彼女は刀を帰した。

「俺の名は黒木齊蔵だ」

魅「じゃあまた今度会おうね坊や」

何故か俺はドキツとした。母と祖母を奪った奴と同じ種族の奴に。しかし美人だった。

夜

「あいつ、何だよ頭から離れない」

？

魅「人間を気に入るなんて初めてね」

その後何度も彼女の修行を受けた。そしてだんだん妖怪への憎しみも消えて行き彼女に恋をした。

そして「無と有を操る程度の能力」が目覚めた。

そしてある日

二人で会っていると矢が飛んで来た。そして自警団と村人たちを連れた父と弟が来た。

宗「兄さん、目を覚まして兄さんはその化け物に騙されている」

父「・・・（俺の命か、息子の幸せを取るかどうしよう）」

弟の方が俺より妖怪への憎しみが強かった。

「見られたのか」

宗「早く来るんだ」

「嫌だ」

宗「まさか兄さん、そんな下種の肩を持つとはね、見損なったよ」
そして彼は剣を抜き斬りかかった。しかし父が出て来た。

父「止める」

宗「父さんまで」

ズシャッ

そして父はあっけなく斬られた。

父「ガハア」

「親父！」

俺は駆け寄った。

父「俺に構うな、お前が好きな彼女と一緒に逃げるんだ（ごめんな、あんまり遊んあげられなくて）」

ザシュッ

しかし父は首を切られ絶命した。

宗「兄さんもすぐ後を追わせてあげるよ」

そして村人に合図した。そして矢を打ったり石を投げたりして来た。村人「出て行け化け物！」

魅「行きますよ斉蔵さん」

彼女は親父の首を持っていた。

「どうするんだこれ」

魅「埋めるんですよ」

しばらくして見付けた花畑に埋めた。

「親父」

魅「あんな人間もいたんですね」

「俺は人間を辞める、ずっとお前と居たい」

そして人間という事を無にして、妖怪という事を有にした。

魅「ずっと一緒ですね」

「あと名前も捨てる」

魅「じゃあ、新しい名前は紫音、この花の名前「紫苑」と私の名前の「音」と合わせました」

「いい名前だそれにするよ」

その後2人で旅をした。そしてある妖怪に目を付けられた。

？「彼女、私の式にしようかしら、あの雑魚は要らないわ」

彼女は空間の裂け目から二人を見ていた。

第二話

数日後八雲紫と名乗る妖怪が攻撃して来た。

紫「貴方、私の式にならない」

魅「は？」

「何だと」

紫「雑魚は黙ってなさい」

魅音はうつむいて手を強く握りしめていた。

魅「・・・しな・・・で下さ・・・」

彼女は何か言った。

紫「受ける気になった」

魅「紫音さんを馬鹿にしないで下さい！」

彼女は殺気を出した。

紫「貴方尻尾は」

魅「はい？そんなものありませんよ私は空狐ですから」

紫「何ですって」

魅「貴方の方こそ雑魚」

その瞬間膨大な量の妖気が感じられた。そして空気が重くなった。

紫「不味いわね」

魅「逃がしませんよ」

彼女は彼女の腕を掴み地面に叩き付けられた。

紫「かはっ」

魅「都に九尾がでたらしいですからそれにしたらどうです」

紫「舐め過ぎてたようね」

彼女は空間の裂け目に入って行った。

俺は初めて彼女の本気を見た。

現代 幻想郷・妖怪の山

2人は山の中腹に住んでいた。

「あの時は無茶したな」

魅「今となつてはいい思い出ですね」

そして2人は同じ布団に入った。

（空狐編・完）

第一話

俺は叢雲紫音^{むらくもしおん}18歳、気が付くと長い階段で寝ていた。

「あれ、さっきまで昼寝してたのに」

近くには刀が落ちていた。名前は「桜楼剣」で刀身が若干桜色だった。

その時

？「動くな」

「？」

後ろから声がした。そこには日本刀を持った白い髪の少女が居た。近くには半透明の煙のような物体が浮いていた。

「ここどこだ」

？「黙れ侵入者」

そしていきなり斬って来た。俺の家は剣道の道場で小さい頃からやっていた。俺は受け流すのが得意だった。

「行けるか」

俺はその剣で受け止めた。そして刃を滑らし受け流した。彼女の剣は勢いで手から離れた。

？「あ」

？2「そこまでにしときなさい」

その時上から髪が桜色の女性が降りて来た。ふつくしい

「すみません、此処どこですか」

？2「あら、外人人？」

「外人人？」

彼女に訊くとそう言った。

？2「ここは貴方が居た世界と違う場所よ、貴方名前は」

じゃあ俺神隠しにでも遭ったのか。

「叢雲紫音です」

？2「私は西行寺幽々子で向こうは魂魄妖夢（紫音？彼と同じ、え

「彼って誰？」

幽「その刀は」

「気が付くと落ちてました桜楼剣らしいです」

幽「行くあて無いんだったら此処で暮らしていいわよ、妖怪に食われたらあれでしょ（何か聞いたことあるわね）」

は、妖怪？そんなものが居るのか

「こんな見ず知らずの奴を泊めていいのか」

幽「いいわよ悪い人じゃなさそうだし」

妖「あれ、私無視ですか」

「じゃあお言葉に甘えて」

妖「何かあつたら斬りますよ」

襲うと思ったのか、俺にはそんなことする根性なんてない

翌朝

「夢じゃなかったか」

？「始めまして、八雲紫です」

いきなり空間が裂け金髪の女性が出て来た。

「うわ何だいきなり」

紫「私が此処へ連れて来たのよ」

「何だって」

紫「貴方には「騙す程度の能力」があるわ」

何、能力だって。

紫「じゃあ私はこれで」

そして消えた。しかし、胸大きいな。

妖「紫音さん朝食の準備出来ましたよ」

「ああ、今行く」

朝食後

今日は庭の掃除をやらされた。そして大きな桜の木を見つけた。

「ん、いきなり頭痛が」
そして意識を失った。

第二話

そして夢を見た。テレビとかで言ってた前世の記憶という奴だった。

俺は桜木紫音種族は人間で西行寺家の娘の婚約者だった。能力は「能力が聞かない程度の能力」だった。

そして今日は家に行った。

？「ああ、紫音殿来たんですか」

彼は魂魄妖忌で此処の門番をしていて半人半霊という種族だ。

幽々子の部屋

幽「あら、紫音来てくれたの紫もいるわ」

一時間後

幽「いよいよ3日後ね」

「そうだな」

結婚は3日後だった。

幽「じゃあね」

この時俺は彼女が能力について深刻に悩んでいるのに気付けなかった。

「いよいよ3日後か」

そして2日後の夜

俺は幽々子の部屋に来た。しかし彼女は居なく書き置きがあった。

「これは」

紙にはこう書いてあった。

やっぱり私のこの人の命を奪う能力に耐えられません、でも好きでした。貴方にはもつといい人が居る筈です、さようなら紫音 西

行寺幽々子

紫「紫音、大変よ今すぐ来て」

そしてスキマに落とされた。

「そ、そんな」

幽々子が大きな満開の桜の木の下で胸を短刀で刺して死んでいた。

俺はすぐさま彼女の亡骸へ駆け寄った。

紫「あ、それ以上近づいたら」

「さよなら、幽々子」

そして既に冷たくなった幽々子に口づけした、この桜からは妖気が溢れていた。そして何か声が聞えた。

？『ハハハ、この娘の能力は凄いな死んでくれてありがとうよ』

その言葉に怒った俺は木に刀を突き刺した。

「黙れ」

？『その程度で我を倒せるとも思ってたか、何！力が弱まった、グ、その刀はかなりの代物か』

そして何度も刺すと花びらが半分以上散り、声が聞えなくなった。

妖「すみません紫音殿、止められなくて」

妖忌が謝った。

「気にするな済んだことだから」

紫「ちよつと封印するから下がってて」

「紫、後は任せた」

彼は帰って行った。彼の眼は涙で溢れていた。

その後

紫「彼、もう長くなさそうね持って半日ぐらいかしら」

妖「この桜が関係あるのですか」

その後紫音は刀を売り払った後衰弱死した。

その頃の幽々子

紫「彼のこと知りたいかしら」

幽「知ってるの」

紫「じゃあ貴方の彼に関する記憶を元に戻すわ」

幽「え、彼は生まれ変わりですって・・・え婚約者、もう何が何だか」

記憶が戻った彼女は困惑した。

紫「纏めると貴方は彼の前世と婚約者」

幽「そうだったの」

その後真っ白な空間に居た。そして黒い影みたいなものが居た。

？「俺と同化してくれ」

そして彼の記憶や知識を手に入れた。その後すぐに目の前が眩しくなった。

その後目を覚ますと縁側で幽々子に膝枕されていた。

幽「起きた」

「幽々子」

幽「昔のことを思い出したわ、貴方の前世は私の婚約者ですって」

「俺もだ」

幽「本当？じゃあ私の好きな花は」

「桜」

幽「正解よ、信じるわ紫音、愛してる」

「俺もだ幽々子」

そしてその夜 西行妖

？「やっと実体化できたか」

桜の木から誰か出て来た。姿は紫音とそっくりだが声が違った。

そして木の周りの結界を刀身が真っ黒な剣で切り裂いた。

そして紫はすぐ様二人の元へ向かった。

紫「不味い、結界が破れたわ幽々子」

「じゃあ、俺が行く」

？「その必要は無い」

その時声がした。そこには俺とそっくりな男が居た。

「向こうから来たか」

幽「あ、」

「しまった」

？「あの桜の前で待ってる」

何と彼女が彼に捕まった。そして彼はすぐ消えた。

幽「離しなさい」

「幽々子、今行く」

そして俺は桜へ向かった。

？「来たか」

彼女は地面に打った杭に縛り付けられていた。

幽「紫音！」

「行くぞ」

？「遅い」

幽々子視点

数分後彼が来た。そして戦い始めた、しかしなかなかあいつに攻撃出来なかった。

？「今だ」

その時彼があいつに刺されて倒れた。

幽「嫌あ、紫音！」

？「ハハハ弱いんぐハッ何、刺されただと」

「どこを見てる」

なんとさっきまでの彼は幻覚みたいなものだったらしい。いつの間

に？

終了

？「グ、何をした」

「お前はずつと騙されていたんだよ」

？「しかしまだだ」

すると俺と奴は白い空間に居た。奴の腹の刺し傷も消えた。

？「大丈夫、女は解放した」

そしてしばらく奴の攻撃をかわしたり攻撃したりを繰り返した。

？「つまらん、さつさと死ね」

「死ねるかああああ」

その時桜楼剣が光り輝いた。そしてあの黒い影が出て来た。

？2「俺も手伝う」

そして二人で持つて彼に突き刺した。

？「無駄だ、すぐ再生する、何？体が崩れて行くだ」と

奴の体は桜の花びらになり崩れ始めた。

？「しかし、これで終わらんお前らもこの空間ごと消えるのだハハ」

そして完全に崩れた。

「ヤバいどうしよう」

？2「奴を打ち破ったその刀なら行けるはずだよってみろ」

「おう、わかった」

そして刀で何度も切り付けた。そして数分後ついに罅が入った。しかし空間の崩壊が始まった。

「やつと壊れた」

？2「早く行け」

そして俺を押し出した。

？2「俺にはもう一つ能力があるそれは「種族を変える程度の能力だ」それでお前を亡霊にした。後、幽々子とずっと幸せに暮らしてやれ、じゃあな」

そして彼は空間と一緒に消滅して、目の前が明るくなった。その時紫が出て来た。

紫「早く来て」

「助かったよ紫」

俺は彼女と一緒にスキマで幽々子の元に帰った。

第三話（前書き）

少しエロ注意

第三話

幽々子は桜の前で待っていた。

「幽々子帰って来たぞ」

幽「よかった無事で」

数日後結婚式が行われた。沢山の幽霊たちが集まった。

幽「やっと挙げれたわね」

「何年経ったんだ」

紫「千年くらいかしら」

遠くから射命丸が写真を撮っていた。

文「相手は誰でしょうか」

その夜

「熱いな」

俺は風呂に入っていたそして戸が開き幽々子が入って来た。

幽「入るわよ」

「（＾＾）」

数分後

幽「背中、洗って」

「分かったよ」

そして彼女の背中を洗った。どうしてこうなった！

幽「次は私が洗ってあげる」

「え」

幽「ほら、座って」

洗って貰っていると柔らかい物が当たっていた。そう、彼女の胸である。

「（おっとヤバイ下がああ／（＾＾）＼）」

幽「どうしたの、あつちよつと紫音下が・・・」

「嫌ああああ見るなああああああ」

彼女に見られるという最悪の事態が起きた。

幽「そんな大声出さなくてももう夫婦なんだし」

「抱きつくな、またうわあああ」

幽「あら、これがいいのかしら」

何と彼女が下を手で触り始めた。ヤバい先から・・・

「あ、ああ」

幽「そんなに気持ちよかったの」

彼女はその後飛び散った「バキューン！」を洗い流した。

そして寝る部屋

「ん、二人用になつてる」

幽「一緒に寝るのよ」

嫌な予感がするな。

そして真夜中

「お腹が重い」

お腹が重くて起きると彼女が乗っていた。

「何d」

喋ろうとしたら彼女の唇で塞がれた。

幽「始めましようか紫音」

「ギヤアアア」

そして童貞卒業した。

次の日

文の新聞「文々。新聞に「白玉楼の主、西行寺幽々子結婚！相手は謎の男」と書かれすぐさま各地に知れ渡った。

（幽々子編・完）

第一話

昔、鬼が山に居た頃

俺は鉄紫音人妖大戦で唯一生き残った妖怪で「あらゆる金属を創り出し操る程度の能力」と「種族を変える程度の能力」の二つの能力を持っていた。そして前者の影響で体が金属に出来るようになっていた。

そして今は妖怪の山へ来ていた。そして一人で月を見ながら酒を飲んでい、髪の毛の長い小柄な鬼を見つけた。

「おい、一人か」

？「誰だ？見かけない顔だね」

「俺は鉄紫音だ、君は？」

？「四天王の一人、伊吹萃香だ」

こいつがこの山の四天王か、しかし可愛いな。

萃「どうかした、ジロジロ見て」

「いや、可愛くて見とれてしまった」

彼女は顔が真っ赤になっていた。

萃「そう言われたの始めてだよ」

それから仲良くなった。

数日後

俺は酒に弱く彼女と飲んだ時すぐ酔っぱらってしまった

萃「こいつ酒弱かったのか、しっかりしな」

「黙ってて悪かった」

萃「そう言えばお前強いのか」

「結構強い、お前よりは年上だ」

萃「じゃあ明日勝負だ」

翌日

萃「じゃあ行くよ」

「かかって来い」

そして彼女がパンチした。そして俺を貫いた。

萃「何だこれ」

傷口からは血ではなく銀色の液体が流れ出て、彼女の体に巻き付き動きを封じた。

「俺は金属に出来る」

萃「でも無駄だよ（この巻き付け方エロいな）」

彼女は霧になって抜け出した。

「厄介だな」

そして俺は妖力を増やした。

萃「何だいその妖気は鬼神よりあるじゃないか」

「じゃあ行く」

俺は鉛で巨大な拳を創り彼女に殴りかかった。

萃「でかいだけじゃ無理だ」

そしてぶつかつた。彼女は2mくらい吹き飛んだ。流石は力自慢の鬼か、鬼じゃなかったら潰されてたな。

萃「降参だ（強い男も悪くないか）」

彼女は負けを認めた。その後数年間かけて惹かれあって行った。

そして現代

俺は70年前幻想郷に来た。

そしてある日

？「あ、紫音」

後ろから声が聞え、振り返ると

「萃香？」

月明かりに照らされた萃香の姿があった。

萃「久しぶりだね」

「地底に行ったんじゃないかったのか」

萃「途中で出て来た」

じゃあ連れ戻しに来る可能性もあるか。

「萃香」

萃「何だ」

「好きだ」

思い切って告白した。今言わないと後悔しそうだ。

萃「紫音、言うの遅いじゃないか」

「ごめんなそっち関係に疎いんだよ」

萃「じゃあファーストキスとかやらをやるよ」

そしてキスされた。

地底

鬼神が命令していた。

？「じゃあ今から連れて帰って来い」

鬼達「分かりました、では行つて参ります」

そして10人の鬼が地上へ向かった。

第二話

次の日

？「萃香、やっと見つけた」

萃香は鬼に見つかった。

「鬼？」

萃「勇義どうして此処に」

勇「お前を連れ戻しに来た」

萃「どうしていきなり」

勇「上からの命令だ知らないよ理由なんか」

萃「こいつも連れてきていいか」

勇「好きにしる行くよ萃香」

そして地底

？「帰って来たか」

勇「一人増えました」

？「ハハッやつと奴に春が来たか」

数年後

住む場所が見つかって普通？の生活をしている。

「ん、なんか頭が」

媚薬を盛られたようだ。

萃「によほほ」

「うわああ離s」

そして一回やってから寝た。

（萃香編・完）

第一話（前書き）

フランが存在しないという設定です。

第一話

俺は赤月紫音^{あかつきしおん}19歳、幼い頃家を放火されて両親を殺されてから祖父の家で暮らしていた。

ある日の夜

祖父「おい、足下に」

「え、うわあああ」

突然足下に開いた空間の裂け目に俺は落ちて行っただ。

祖父「出て来い、居るんじゃない」

？「ばれてたの」

祖父がそう言うのと彼の近くに裂け目が開き、そこから金髪の女性が出て来た。

祖父「何年ぶりだ」

紫「50年くらいね」

祖父「どうして紫音を」

紫「それより記憶を消した筈」

祖父「そんなことしたか」

紫「効いてなかったの」

祖父「それでどうして連れて行っただ」

紫「彼は能力者よ」

祖父「じゃあ今生の別れか」

紫「じゃあ、さよなら」

幻想郷

紅魔館

紫音は庭に転がっていた。

レ「誰、こいつ外来人？」

咲「どうしますか」

レ「部屋に連れて行きなさい、此処で死なれたらあれでしょ」
咲「かしこまりました」

レミリアは彼の様子を見に行った。

レ「寝てるわね」

「・・・して」

レ「寝言かしら」

「どうして逝っちまったんだ父ちゃん、母ちゃん」

レ「彼、まさか」

その時彼の手が彼女の羽の根元を掴んだ。彼女はこの部分が弱かった。

レ「ひゃん、ちょっと、揉まないで、らめえ」

そして彼女はぐったりしてベッドの上に倒れた。

朝

彼はベットから転げ落ちレミリアの上にのしかかった。

レ「寝相悪いわん!」

その時唇が当たってキスしてる状態になっていた。

咲「お嬢様此処にいましたkお嬢様に何を」

そして咲夜が来てしまった。彼女はナイフを取り出した。

レ「咲夜、止めなさい、様子見てたら寝てしまっただけよ（ファ、ファーストキスがあああ）」

咲「ですが」

レ「止めなさい!」

咲「分かりました（後で絶対・・・）」

「ん、どこだ此処」

俺は羽の生えた少女の上に居た。

レ「落ち着いて」

「あ、すみません寝相が悪くて」

レ「私はレミリア・スカーレット彼女はメイドの十六夜咲夜」

「俺は赤月紫音」

レ「此処は紅魔館よ、それで私は吸血鬼（赤月紫音？彼と一緒にじゃない）」

はあ？こんな美少女が吸血鬼だとお、ふざけるなー！

数時間後

色々あつて俺は此処の地下にある図書館で働くことになった。

そして床を掃除しているといきなりナイフが右肩に刺さった。

「！」

咲「・・・」

そしていきなりメイドの咲夜が現れナイフを数本投げた。ナイフは腹部に全て刺さった。

「ガ」

そして背後に一瞬で移動し背中にもナイフを数本刺した。

「ア、ガ」

そして心臓の近くを刺された。

「（もう死ぬのか）」

だんだん意識が遠のいて来た。

そして完全に意識を失った。

しかし気が付くと白い空間にいた。目の前には赤いゴスロリを着た黒いセミロングの女性が立っていた。

？「久しぶりね」

「は、誰」

？「あ、記憶消してたの忘れてた」

そして俺の頭に手を乗せた。そして色々な記憶が出て来た。

俺の前世は神が間違つて死なせてしまった悪魔で、俺は普通の人間に生まれ変わっていたらしい。

そして彼女がその神らしい。

「あ、思い出した確かお前は有紀^{ゆうき}」

有「悪魔に戻すわよ、起きたら戻ってるわじゃあね」

そして目を覚ますと傷は消えていて強大な魔力を持っていて能力は「探す程度の能力」と八雲紫と同じの「境界を操る程度の能力」を持っていた。

「いつ見てもこの館は赤い」

その頃

外の何処かの教会では昔から幻想郷を調べていた。そして行き方をあみだすまで長い時間がかかった。

？「赤い館に居る吸血鬼を殺して来い、生け捕りでもいい、殺したら証拠に写真を撮って来い」

そして5人のヴァンパイアハンターと3人の術者をを日本のある荒れ果てた神社に送った。

そして神社で術者が地面に模様を描き呪文を唱えた、すると神社の前の空間が裂けた。

術「では私たち2人は此処で待っています」

術者の1人はヴァンパイアハンターに着いて行った。

そして紅魔館を探した。

？

紫「あら？結界が壊れてるわ、直しておかないと」

紫はすぐ結界を治した。

第二話

紫音はレミリアを昔助けたことがあった。そして彼女の初恋の人だった。

レミリアの部屋

レ「（この魔力はまさか・・・行ってみようかしら）」

地下

パ「何、私より大きい魔力？え貴方は・・・」

髪の毛が紫の少女が来た。

「どうやら俺は悪魔らしい」

その時レミリアが凄い勢いで飛んで来た。

レ「紫音！やっぱりあの時の悪魔だったの！あ、きゃあ」

一瞬ピンクの何かが見えて目の前が真っ暗になった。息苦しかった。まさかレミリアの・・・

レ「あれ？どこ」

パ「下よ」

彼女は彼の顔の上に乗っていた。

レ「ひゃん、舐めないで」

パ「早くどけたら」

レ「あ」

「（^ ^）」

パ「何その顔、見えて凄くイラつくんだけど」

「久しぶりだなレミリア」

レ「会いたかったわ紫音、じゃあ私は部屋へ戻るわ」

この時俺は着いて行けばよかったと思う羽目になるとは思っても居なかった。

少し前、ヴァンパイアハンターは紅魔館に着いていた。
美「？」

美鈴は5人のうちの1人の「眠らせる程度の能力」により眠らされた。

咲「誰」

咲夜も同じように眠らされた。

レミリアは部屋へ向かう途中に彼らに出会った。

レ「誰よ侵入者」

男「これでよし（俺の能力って凄いな）」

彼は封じる程度の能力を持っていて、彼女の力を封じた。

レ「5人くらい余裕なつてあれ力が出ない」

その後薬で眠らして生け捕りにした。かかった時間は10分くらいだった。

そして再び外へ向かった。空港では術者がレミリアを入れたバッグを弄ってばれないようにした。

数時間後

紅魔館

咲夜が大急ぎで図書館に入って来た。

咲「大変です、お嬢様が何処にも居ません（え、殺した筈）」

パ「何ですって」

「場所は特定した」

そして俺はその場所へとつながるスキマを開いて、飛びこんだ。

出た先は教会だった。

そして俺は地下牢辺りを探した。

そして一番奥から声がした。

？「嫌あ、止めてきゃああ」

男「始めようか」

急いで扉をこじ開けると鎖で脚と腕と首を繋がれたレミリアが男に服を脱がされていた。

男「誰だギャアア」

俺は男の首をスキマから出した剣で斬った。

そして彼女の鎖を魔法で粉々にした。その時紅魔館へ侵入したハンターが来た。

？「動くな撃つぞ」

「レミリア大丈夫か」

レ「大丈夫よ」

「俺はひと仕事してくる」

そしてレミリアをスキマで送った。

？「あいつを何処へやった」

「喋るなとつとと死ね」

俺は全員をスキマで挟んでバラバラにした。

その時地下に彼らの断末魔が響いた。

「司教の部屋はあそこか」

吸血鬼討伐を命じた司教の部屋

その時部屋のドアが吹き飛んだ。

司「？」

「始めまして、そしてさようなら」

俺は無詠唱で爆発させる魔法を使った。俺はすぐスキマに入った。

そして教会は瓦礫の山になった。

紅魔館

「ただいま」

レ「早かったわね（今度こそ紫音に・・・）」

夕食後

俺は一人でベランダで隙間から出したワインを飲んでた。そして後ろから彼女が来た。

レ「ねえ、私紫音のことが好き」

「ブホッな、何だとおおお！」

それを聞いて俺は思いつきりワインを吹いた。

「俺でよかつたら別に」

俺は彼女の小さな体を抱き締めた。

レ「わ、私でいいの」

「もちろん」

三日月の明かりが二人を照らしていた。

その後俺は部屋で寝ていた。そして夜中に目を開けると・・・

「何してるんだ」

レ「一緒に寝ましょ」

レミリアが隣に入っていた。

「（狭い、落ちそう）」

翌朝

俺はベッドから落ちていて上にレミリアが乗っていた。顔が近い。

「早く起きてくれ」

レ「zzzz」

レミリア編・完

バックエンド（前書き）

レミリアが好きな方は閲覧注意

バッドエンド

少し前、ヴァンパイアハンターは紅魔館に着いていた。

美「？」

美鈴は5人のうちの1人の「眠らせる程度の能力」により眠らされた。

咲「誰」

咲夜も同じように眠らされた。

レミリアは部屋へ向かう途中に彼らに出会った。

レ「誰よ侵入者」

男「これでよし（俺の能力って凄いな）」

彼は封じる程度の能力を持っていて、彼女の力を封じた。

レ「5人くらい余裕なっであれ力が出ない」

男「お嬢ちゃんいいことしない」

レ「嫌、止めて触らないでキヤアア」

レミリアは5人に犯された。

1時間半後

俺は彼女の部屋へ入った。

「レミリアえ、嘘だ」

そこで俺は見たのは胸に杭を打たれ、首を切断され、手足をへし折られて死んでいるレミリアの無残な姿だった。

咲「お嬢さま・・・」

男「写真も撮ったし帰るか」

「帰る？笑わせるなお前らは此处で死ぬんだよ」

俺は一人目を刀で切り刻み二人目の首を斬り三、四人目は咲夜に殺された。

男「ギヤアアア」

五人目は俺が同じように切り刻んだ。

そして彼らを送った組織を探して、スキマで向かった。

男「誰だ」

「喋るな」

そして俺はある禁術を使い敷地全体を消滅させた。代償は俺の魂が
跡形も残らず消滅することだった。

「レミリアごめん助けてあげられなくて」

そして俺は消えた。

数日後、紅魔館では咲夜が行方不明になり、美鈴は人里で働きだした、パチュリーはそのまま残った。

幽香編（前書き）

1話で終わります。

幽香編

20年前幻想郷

俺は妖怪の出水紫音風見幽香の夫だ、俺は今幻想郷を危機に陥れた妖怪天野凶と戦っていた。

「これで終わりだ」

凶「離せ」

「これが俺の最高傑作だ」

俺は彼を羽交い絞めにして俺の能力「爆弾を創造する程度の能力」で爆弾を創りそれを爆発させた。紫が強力な結界を張っているのであまり被害は出ないはずだ。

紫「まさかこんなことをするなんて」

吹き飛ぶ瞬間俺はもう一つの一回しか使えない能力「転生する程度の能力」を使った。幽香、絶対に帰るからな。

その後幽香はおかしくなった。

幽「（ねえ、いつ帰ってくるの紫音）」

現代

人間に転生した彼はいつでも妖怪に戻れるのだが、死ぬ前の記憶を失っていた。

ある日

「いきなり頭痛が」

そしてついに全てを思い出した。彼は妖怪に戻った。能力は「闇を操る程度の能力」に変わっていた。

？「見つけた」

後ろから声がしたと思ったら俺は落ちて行つた。多分紫か

幻想郷

俺は彼女の花畑に落下した。

幽「誰？貴方」

「（分かってないのか）」

幽「強そうね私と戦つて負けたら奴隷よ」

「じゃあ俺が勝つたら俺の物だ」

そう言つた瞬間彼女の拳が掠めた。

幽「よそ見していると死ぬわよ」

「（能力でこうやって）」

俺は闇でハンマーを創り彼女の傘にぶつけた。

幽「何それ」

そして傘が折れた。

「貰つた」

俺は闇で創つた手で握つて上へ投げた。

幽「え」

落ちる時に彼女が蹴ろうとした。黒の下着が丸見えだった。

幽「あ、バランスが（こいつ見たな）」

しかしバランスを崩し俺の上に乗った。

幽「死ぬ！変態」

「無駄だ」

俺は霧のように散つて彼女の後ろに立ち闇で縛つた。

「おい幽香、俺の顔を忘れたかああ」

そして俺は彼女に抱きつきキスした。

幽「！（この顔見たことがある）」

「思い出したか」

幽「え、貴方名前は」

「出水紫音」

幽「嘘、まさか本物」

彼女は涙を流した。俺は拘束を解いた。
幽「お帰り紫音、遅かったじゃない」
「ただいま」
そして抱き合った。

（幽香編・完）

ミステリア編

俺は霧野紫音妖怪だ。今は幻想郷で平和に暮らしている。
その夜いつも行っている夜雀の屋台へ来た。

「ミステリアいつもの奴」

ミ「分かった」

二人は恋人同士であった。

「そう言えば明日、博麗神社のお祭りに行かないか」
ミ「じゃあ明日は休業するわ」

次の日

彼女を迎えに行った。

ミ「準備できたわ」

彼女は浴衣を着ていた。

神社

ミ「コレしましょう」

最初は射的だった。俺が撃ったのは白い花の模様が付いた髪飾りだった。

「やるよ」

ミ「早速付けてみるわ」

次は輪投げで彼女がやった。

その後かき氷を買った。

ミ「はい、あーん」

「や、止める恥ずかしいぞ」

そして帰ることにした。

ミ「じゃあ、また」

「気を付けるよ」

そして彼女は一人で帰っていた。

男「おい、あいつ良さそうだ」

後ろから3人の男達が来た。彼らは連続強姦魔であった、リーダー格の男は「封じる程度の能力」を持っていた。

ミ「何、貴方達まさか例の強姦魔」

男「行くぞお前ら」

ミ「あれ能力が使えない」

男2「まずは親分から」

ミ「きゃ、離して」

そして浴衣を脱がした。あと、髪飾りが外れて彼らに踏まれ、壊れた。

その後

男「じゃあ帰るか」

ミ「嫌、もう止めて」

数分後彼女は乱れた服を直して帰った。

翌日

俺は彼女の家へ来た。

「入るぞ」

ミ「紫音」

彼女は抱きついて来た。そして泣いていた。話によると彼女は人里で被害が続出している強姦魔によってレイプされたらしい。

「髪飾り壊れたのか」

ミ「ごめん」

その夜

一樣屋台は開いた。

「俺ちよつと用事があるからちよつと行ってくる」

俺は強姦魔を探した。

そして気配を消し人里へ入った。そして人通りが少ない場所を探した。

そして服を脱がされている女性を見つけた。

「おいお前ら昨日ミスティアを襲ったのはお前らか」

男「昨日の奴の彼氏か」

「分かったお前らか、お前は帰れ」

そして俺は殺傷能力のない弾幕を彼らに浴びせまくった。

男「あ、があ」

？「何事だ」

音を聞いた慧音と村人たちが駆けつけた。

「こいつらが例の強姦魔だ」

男2「もう許ひへ」

慧「連れて行け」

そして俺は帰った。

ミ「お帰り何してたんだ」

「例の強姦魔にOHANASHIしてきた」

ミ「そうか、別にいいよ」

「ミスティア、新しい髪飾りだ」

それは紫の蝶の模様が付いていた。

ミ「ありがとね」

彼女は早速着けた。さらに綺麗になった気がした。

（ミスティア編・完）

第一話

俺は緋野紫音^{ひのしあん}外来人だ。俺を連れて来た八雲紫は俺に「能力がある」と言っていたがまだ目覚めていない。

彼は気付いていないが彼は複数の人に好意を寄せられていた。そして今は博麗神社に住んでいて幻想郷各地を回っていた。

「今日は吸血鬼の館に行こう」

霊「早く帰ってきなさいよ」

昨日の宴会で吸血鬼のレミリアに「明日来て」と言われたので紅魔館へ行くことにした。

俺は一通り弾幕が撃てようになっていたので妖怪が来ても大丈夫だ。

そしてそこへ着くと門番が寝ていた。館全体が真っ赤だった。

「あの、すみません昨日招待された緋野ですが」

？「では中へ」

そう言うとな彼女はいきなり起きてそう言った。

レミリアの部屋

咲「彼が来たようです」

レ「ここへ案内して」

そして門を出てしばらくすると突然メイドが現れた。

「うわ、びっくりした」

咲「では案内します」

内部も赤かった。

そして彼女の部屋

咲「連れてきました」

レ「入って」

「約束通り来ました」

レ「貴方には私の妹の遊び相手をしてもらっわ」

咲「いいんですか」

レ「大丈夫、死の運命は見えない」

「死ぬ？そんな大げさな」

咲「ではこちらへ」

案内された場所は地下室だった。

咲「では、気を付けて」

そして中へ入った。

「なんだ掃除してるのかこの部屋」

？「誰、新しい遊び相手？」

そこには金髪の背の低い少女が座っていた。何！可愛いだと

「で、何をするんだ」

？「もちろん弾幕ごっこだよ」

その瞬間彼女の表情が物凄く笑顔になった。

？「イクヨ禁忌「フォービドゥンフルーツ」」

そして大量の弾幕が俺を直撃した。そしてあっさりと気絶した。

？「え？大丈夫」

その時彼女は正気に戻った。そして彼を自分のベッドで寝かした。

目を覚ますと彼女の顔が近くにあった。ちょっと近いつて

「ちょっと離れてくれ」

？「ねえ、名前何？私はフランドール」

「俺は緋野紫音だ」

フ「ねえ大丈夫」

「大丈夫だ少し気絶しただけだ」

フ「何か面白いことない」

「あ、これとかどうだ」

俺は埃だらけのチェス盤と駒を見つけた。

そしてルールとかを教えて、一回やってみた。

フ「あー負けた」

そして転がったので白い下着が見えた。あ、下が・・・

フ「きゃ、見ないでよ」

「ギャアア」

そしてチェス盤で殴られて再び気絶した。

フ「あ、またやつちやった」

数分後目を覚ました。

「ん」

フ「ごめんねいきなり殴って」

「そう言えばどうしてこんなところに居るんだ」

フ「私の力で皆を傷つけたくないから」

「どんな力」

フ「こっやつてキュツと握るとね」

その瞬間近くの石が跡形も残さず消えた。

「おっ」

フ「怖いでしょ私、こんなじゃ誰も好きになってくれない」

その後俺は帰った。

フ「また来てくれる」

「多分な」

彼が出た後

フ「あんな人始めて、紫音なら私を貰ってくれるかな」

彼女は彼を気に入った。

レ「どうだった」

「一人ぼっちで寂しそうだったよ」

レ「じゃあまた来てくれるかしら」

「もちろん」

博麗神社

霊「お帰り、ご飯できてるわよ」

そして風呂に入った後寝た。

第二話

数日後

霊「ね、ねえ紫音」

「何だ顔赤いぞ」

霊「やっぱり何でもない」

「何でもないのかじゃあ行ってくる」

俺はまた彼女に会いに行った。

そして紅魔館

レ「フランが楽しみに待ってたわよ（赤の他人がこんなあつさりとフランに馴染めるなんて）」

「そうか」

地下

フ「来てくれたんだ」

そして飛びついて来た。

「ギャアア」

凄いい勢いだっただので凄いい痛かった。

フ「あ、大丈夫」

「く、黒」

彼女は俺の腹のあたりで尻もちをついていたのであれが見えていた。

フ「変態」

俺は頭を蹴られ気絶した。体持つかない

起きるとまたあのベッドの上だった。

「これで三回目くらいか」

フ「ごめん、力加減分らないの」

「今日は何する」

フ「えっとこれ」

出したのはリバーシ（オセロ）だった。
そしてルールを教えたりして始めた。

「何、この俺が負けただと」

結構自信があつた。

フ「わーい勝った」

ちよつとまた寝ころぶなよ死にたくない。あ、こいつまたやりやがった。

フ「ちよつとどこ見てんの」

今度はデコピンで済まされた。でも頭が割れそうだ。

フ「ねえ、私紫音の事が好き」

「ちよつと変な冗談止めてくれ俺みたいな変態を好きになるわけないだろ」

フ「嘘じゃないもん死んじやえ馬鹿あ」

その瞬間天井に穴を開け俺を投げた。

「ゲホ」

俺は庭に出ていた。そして彼女がすぐ出て来た。彼女から赤黒いオーラが吹き出していた。そしてそれは煙みたいに空へと昇っていた。

フ「紫音見付ケタア」

「う、うわああ」

俺は逃げようとした。

フ「ネエニゲナイデヨ」

「アアアア」

俺は両足を吹き飛ばされた。彼女は俺の近くに立ちスペルカードを出した。

フ「ネエ、紫音が死ンダラ私ダケノ物ダヨネ禁忌「レーヴァテイン
キヤアアア」

その時彼女に太いレーザーが直撃した。

？「本借りに来たら凄いことになってたぜ」

「魔理沙か」

すぐに霊夢が来た。

そしてフランと戦っていた。

フ「痛い」

霊「よくもやってくれたわね、紫音を殺そうとしたことを後悔させてあげるわ」

そして途中で正気に戻ったフランは徐々に押されていった。

そしてレミリアが出て来た。

レ「ちよつと！狂ったけどやり過ぎよ」

「フラン！おいこれ以上は」

魔「おい霊夢それはちよつとやり過ぎだ」

霊「五月蠅い！黙ってなさい」

魔理沙とレミリアが止めようとしたが一撃でやられてしまった。

俺は彼女が死にかけているのを見ていた。「畜生！俺がもつと強ければ」と思ったその時、脳内に何かが思い浮かんだ。

「え、これは「あらゆる能力を完璧に使う程度の能力」俺の能力か」そして俺は能力で脚を再生してフランの所へと向かった。

「殺す気だったよねえ？」

フ「し、紫音、脚が」

霊「え」

俺は彼女の手を掴んで投げた。俺はマジギレすると喋り方が変わるのだった。

「フラン大丈夫か」

フ「紫音、私のこと好き？」

「もちろん、さっきはごめんな」

霊「紫音、もう帰ってこなくていいわ、フランと一緒に幸せに暮らしときなさい」

霊夢は帰って行った。彼女の眼には涙が浮かんでいた。

その後

レミリアからOKが出たので一緒に暮らすことになった。寝る部屋は彼女の部屋だった。そして同じベッドだった。

「なあ、俺も吸血鬼になっていいか」

このまま人間だと数十年で死ぬので俺は種族を変えた。

フ「別にいいよ、人間だったらすぐ死ぬからね」

「じゃあおやすmフ」何言ってるの？今夜は寝かせないよ」ギャアアア」

そしてフランに童貞を奪われた。

（フランドール編・完）

第一話

俺は秋山紫音、妖怪の山に住む長生きの妖怪だ。能力は「消滅させる程度の能力」だ。

今日は山で宴会があつた。

「ん、あそこに居るのは誰だ」

俺は隅の方で酒を飲んでいゝゴスロリとかいう服を着た女性を見つけた。一目惚れだ。

「おい、お前一人か」

？「あまり近づかないでください」

「どうして」

？「私、厄神なので厄が移りますよ」

「何だそれ」

？「こういうものです」

そして黒い霧状の物を見せた。

「大丈夫、能力で無効化出来るんだ」

？「そうですか」

「じゃあ一緒に飲むか」

？「あの、お名前は？」

「俺は秋山紫音、貴方は」

？「鍵山雛です」

1時間後

「おい、お前飲み過ぎだ」

雛「そーですか」

その時彼女は俺に抱きついた。や、止める胸が当たってる！下が嫌ああああ

「とりあえず家へ連れて行こう」
そして家へ運んだ。

「あ、布団どうしようか」

布団が一人分しかなかったので彼女を入れた。俺は布団の隣だ。

翌日

「まだ寝てるのか」

雛「zzz」

「起きろおお」

雛「はっ此処は？」

「昨日酔いつぶれたから俺の家へ連れて来た」

雛「すみません、では今度お礼をします」

そして彼女は帰って行った。

第二話

その次の日の夕方

雛「お礼しに来ました」

「何してくれるんだ」

雛「夕食作りますね」

彼女が作ったのは野菜炒めとご飯と味噌汁だった。

「美味しい」

雛「そう言ってもらえて嬉しいです」

その後

雛「では帰ります」

「気を付けろよ」

数日後彼女は溜めこんだ厄が限界まで達していて危険な状態だった。
雛「もう限界」
そして厄が溢れ出した。そして黒い霧になって幻想郷全域に広がった。

博麗神社

霊「異変ね」

魔「そうらしいな」

霊「勘によると妖怪の山辺りね」

そして二人は異変の元凶を探しに向かった。

その頃の紫音

「何だコレまさかこの前の厄」

彼は彼女を探しに行った。

そして2時間後

「見つけた」

彼女は目が虚ろで顔は無表情だった。

「おい雛大丈夫か」

雛「・・・」

「おい、何か言えよ」

雛「・・・」

「（コレ言えばいいかな）」

俺はあることを思いついた。

「雛、お前が好きだ」

雛「！」

若干表情が変わった。よし、もつと言えば。

「もう一回言う好きだああああ」

雛「紫音・・・さん？」

「厄消すか」

俺は能力で溢れた厄を消した。その時誰かが来た。

？「やっと見つけたってあれ？」

？2「おい、黒い霧が消えてるぞ」

？「さっきのは何だったの帰りましょ」

そしてすぐ帰って行った。さっきのは博麗の巫女か。

その後

雛「さっきのは本当ですか」

「本当に決まってるだろ」

雛「私でいいのですか」

「当たり前だ」

雛「では私でよければ」

そして彼女は俺を抱きしめた。

（雜編・完）

レミリア編 2（前書き）

紫音は出てきません。

レミリア編 2

紅魔館

？「やっと帰って来たぜ（レミリア、待ってるよ）」

門の前に誰かが来た。

美「誰ですか」

？「美鈴、俺を忘れたか」

美「まさか、執事だった甲也さん^{「いっや」}」

「そうだ俺だ」

彼は妖怪で紅魔館の元執事でレミリアと「帰ってきたら結婚しよう」と約束していた。

その時ナイフが飛んで来た。

咲「侵入者ね」

「新しいメイドか」

咲「何言ってるの」

美「咲夜さん彼は咲「黙ってなさい」」

美鈴が説明しようとしたが言えなかった。

咲「覚悟しなさい」

レミリアの部屋

レ「この気配まさか」

レミリアは外へ向かった。

俺は咲夜とかいうメイドと戦っていたが動きが不自然だった。
「どういう仕組みだ」

レ「甲也ああ」

「おっ」

咲「お嬢様」

その時レミリアが俺に向かって飛んで来た。夜だったので日光は大丈夫だった。

レ「ぎゃあ」

軌道がそれレミリアが地面に激突した、その時にスカートがめくられて白い下着が見えた。

レ「あ、見ないで」

「すまん」

レミリアが立ち直った。

レ「咲夜、彼は敵じゃない、私の婚約者の野木甲也」

咲「すみません」

その後俺が昔使っていた部屋で寝た。

「ああ疲れた」

数時間後彼は目覚めた。

「ん、誰か居る」

布団を捲るとレミリアが腹の上に居た。

レ「zzzz」

起こすのもあれだったのでそのまま寝た。

一日後

レ「いよいよ明日ね」

「そうだな」

翌日

結婚式が行われた。そしてその日の夜

レ「アアアア」

何故かレミリアが暴走した。フランドールも同じように暴走していた。

パ「早く結界を張らないと」

そして紅魔館の周囲と地下室に結界が張られた。

フ「アハハ遊ボ、咲夜」

咲「部屋の封印を破った」

咲夜とパチユリーはフランの相手をした。

庭

レミリアは彼と戦っていた。いつもよりも格段に戦闘能力が上がっていた。

「月が赤黒いだと（まさか千年に一度なるというブラッディ・ムーンか）」

地下の図書館の本に書いてあったがまさか本当だったとは。

レ「何ヨソ見シテルノ死ニタイノ？」

「しまっせ」

そしてグングニルを雨のように降らしてきた。

「ああああああ」

その中五本が俺に刺さった。その中の一本が胸に刺さった。そして彼女は俺の血を吸った。

レ「？」

レミリアは正気に戻った。

レ「そんな嘘嫌ああああ」

美「お、お嬢様・・・」

彼らの戦いを呆然と見ていた美鈴は彼女に駆け寄った。

彼女の悲鳴が木霊した。

咲「戻った」

フ「え？咲夜？」

パ「よかったわ」

三人は庭へと向かった。

レ「嫌、死なないで」

「・・・（レミリア・・・ごめんな）」
その後彼は庭に埋められた。レミリアは彼の遺体にキスした後棺桶の蓋を閉めた。

翌日

甲也の墓の土が噴き飛んだ。そして吸血鬼になった甲也が出て来た。
「戻って来たぞレミリア」

彼女の部屋

レミリアは膝を抱えてうづくまっていた。
レ「（甲也）」

俺はレミリアの部屋へ来た。扉を開けるとレミリアが壁に寄り掛かって座っていた。膝を抱えていたので桃色の下着が見えていた。

「レミリア、帰って来た」
レ「甲也？」

「それと下着見えてるぞ」
レ「甲也ああああ！」

彼女は俺に飛びつき泣いた。

レ「よかったあ、本当に」

咲「こ、甲也さんどうして」

咲夜が入って来た。

「死ぬ時レミリアに吸われたから吸血鬼になっただけらしい」

その夜

彼女の寝室で一緒に寝ることになった。

「レミリア顔が近い」

レ「いじゃない夫婦なんだから」

猛り立つ息子がばれないかヒヤヒヤしながら寝た。

レミリア編2（後書き）

紫音は次のフランドール編2から出てきます。

第一話（前書き）

レミリア編2と同じ世界です。

第一話

甲也が来る3週間前、紅蓮紫苑くれんしおんという種族不明の男が幻想郷に現れ各地を襲撃した。しかし霊夢が鬼巫女化していたので博麗神社へ来た時に彼女に負けて消滅した。

外の世界

俺は紅蓮紫音、昔捨てられていたのを孤児院に拾われた、種族はよく分からない。そして「境界を操る程度の能力」「持っている能力を完璧に使いこなす程度の能力」「軌道を操る程度の能力」を持っていた。

何と彼はあの紅蓮紫苑と瓜二つだった。

「幻想郷？」

俺はインターネットでそういう言葉を見つけた。そのサイトによると日本の何処かにあり妖怪がそこに住むという。唯一そこへ行ける場所が博霊神社という朽ち果てた神社らしい。

「行ってみようか」

俺はそこがあるとされている場所へスキマで移動した。

「ここか」

神社は今にも崩れそうだった。あと狛犬には蔦が絡まっていて石畳には苔がびっしりと生えていた。

そして建物の中へ入った。中から何か凄い力が感じられた。その時突然目の前が明るくなった。

「ここは」

何処かの神社の鳥居の前だった。そして建物付近に誰かいた。

「あの」

霊「どうして、まだ生きてたの」

「？」

魔「マスタースパーク」

そして魔女みたいな服装の少女が太い光線を放ってきた。

「ヤバ」

俺は軌道を上に曲げた。

霊「夢想封印」

もう一人の少女が大量の光の弾を出した。

「何なんだ」

俺は全てスキマに入れた。

霊「スキマ？」

「さつきから何なんだ」

魔「もう一回！マスタースパーク」

同じように俺はそれを自分から逸らした。

「（あいつらみたいに出来るかな）」

俺は手に力を込めた。すると紫色の光弾が大量に出た。

霊「その弾幕の色！決まりね夢想天生」

「やばい逃げよ」

危険を感じた俺はスキマを開いて逃げた。

？「お兄ちゃん誰？」

出た場所は暗い部屋だった。そして仰向けで倒れていた俺を金髪の少女が覗き込んでいた。

「（可愛い、って顔近いな）」

？「何やったの急に出て来たけど」

「これか？」

俺はスキマを開いた。

？「面白そう」

そして彼女はそこへ入って行った。

「おい、待て」

俺は急いでスキマへ入った。

？「何もないね」

「やっと追いついた」

？「私はフランドールっていうのお兄ちゃんは？」

「俺は紅蓮紫音だ」

フ「じゃあ紫音って呼ぶよ」

「出るぞ」

フ「えー」

そして部屋に戻った。

フ「何か面白いこと無い」

「これとかどうだ」

俺はスキマからトランプを出した。

フ「どうやるの」

「今から教えてやる」

レミリアの部屋

レミリアは酔っていた。

レ「うゝ」

甲「酒弱過ぎだろ（あれ、何かおかしくなっていた）」

咲夜はドアの隙間からから見ていた。

咲「（この媚薬凄いわ）」

甲「レミリア」

そして彼女を押し倒した。

第二話

その後フランと神経衰弱などをしたが全て俺が負けた。

フ「ねえ、紫音って侵入者だね」

「そ、そうなるな」

何を考えてるんだ。

フ「それではささない代わりに兄弟の代わりになって」

「は？」

フ「断つたらばらすから」

遠まわしに脅してるな。別にスキマでいつでも逃げれるが外に居てもどうせ襲われるからここに留まることにした。

「そんなことか」

？「妹様、夕食が出来たので来てください」

フ「ちよつと適当な場所に隠れてて、今行くよ」

そして俺はベッドの下に隠れた。

ガタン

「行つたか」

そして数分後地下の部屋を探索した。

「ここ地下牢の隣だったのか」

一時間後

「帰って来たか」

フ「大丈夫だった」

「それよりどうしてフランは地下にいる」

フ「私狂って暴れたら手がつけられないの、それとこつやって握ると」

彼女が右手を握った瞬間、近くの石ころが粉々になった。おお怖い怖い

「えつと確かここに」

俺はスキマを開き赤い指輪を取り出した。

「コレはめてみる」

フ「うん（い、いきなり指輪！？早すぎるよ）」

すると指輪が一瞬黒く輝き、もとに戻った。

フ「何したの」

「それにお前の狂気を封じた、危ないから貸せ」

フ「うん」

俺はそれをスキマに戻した。

「腹減ったから此処で食っていいか？」

フ「別にいいよ」

俺は隙間からハンバーガーとポテトとコーラ（ペットボトル）を出した。

「じゃあ、頂きます」

数分後コーラを飲んできるとフランがずっと見ていた。

フ「それ何美味しいの」

飲ませたら間接キスじゃないかああああそうだとコップだ。

俺はコップをだしてそこに入れた。

「はい」

フ「何これなんかシュワシュワ言ってる」

「コーラって言うんだ」

神社

霊夢と紫が話していた。

霊「紫、あいつがまた出た」

紫「何ですって、いつ」

霊「今日の昼過ぎに神社に来たわ、何故かスキマが使えたわ」

紫「まだ生きてたっていうの紅蓮紫苑」

？

誰かが幻想郷に来た。そいつは俺とそっくりだった。こいつを使えば復活出来る！

第三話

2日後の夜

霊夢が勘で紅魔館に居ると思いそこへ八雲紫、八雲藍、霧雨魔理沙、伊吹萃香が向かった。

美「何ですか」

霊「ちよつと眠ってて、萃香」

美「うっ（しまった）」

彼女は萃香に首元を叩かれ気絶した。

霊「じゃあ、行きましょ」

そして紅魔館内部で咲夜が来た。

咲「ちよつとなにこの顔触れは」

紫「藍、足止めしてて」

藍「承知しました、紫様」

そして藍と戦わせた。他の者は霊夢の勘を頼りに進んで行った。

地下の図書館

パチュリーにはれずに行けた。

フランの部屋

「誰か来る」

しかもそのうち二人が大妖怪だった。そしてこの前の少女達（霊夢・魔理沙）の霊力と魔力も感じられた。

フ「魔理沙の魔力」

「ヤバい殺される」

フ「え、下着でも盗んだの」

「違う、誰かと勘違いされてる」

フ「じゃあ一緒に相手してあげる」

そして奴らが来た。

魔「手前えフランから離れろ、マスタースパーク」

彼女は怒っていた。

「ヤバイ」

フ「スキマあるじゃん」

「あ」

そして外へ繋がるスキマを開けた。

フ「私も」

紫「させないわよ」

しかし紫が妨害したため庭に出て来た。

「チツ妨害したか」

そしてすぐ彼女達が来た。そして蝙蝠みたいな羽を生やした少女も来た。

レ「貴方、フランに何を」

夫の甲也は窓から見ていた。

甲「喧嘩はよそでやれよ」

そして彼女は赤い槍を投げた。俺はすぐ軌道を変え適当な方向に逸らした。

レ「当たらない」

霊「夢想封印」

紫「四重結界」

魔「マスタースパーク」

大量の光弾と一本の太いレーザーが飛んで来た。スキマを開こうとしたが遅かった。

「うわあああ」

俺に全て直撃した。

萃「大江山悉皆殺し！」

その後俺は背の低い鬼に投げられた。

「ゲボアアア」

フ「紫音！」

「フラン、これをやる」

俺は自分の能力が使える指輪と2丁の白い自動式（全自動）拳銃を渡した。

フ「これは何」

「此処をを引くと弾が出る」

妖力、魔力、霊力、神力などで出来た弾を打てる。

フ「じゃあ行くよ」

彼女は引き金を引いた。

ズダダダダダ・・・

そして軌道を弄り避け辛くした。

紫「軌道が読めないでも彼女なら」

フ「そこ」

彼女はスキマに弾を撃った、そして紫の背後に飛んで来た。

紫「嘘!？」

霊「夢想封印・拳」

霊夢は即興で新技を創った。そして虹色に輝く右手で彼女を殴った。

フ「かはっ」

そして彼女は気絶した。

霊「次はあんたよ」

彼は意識を失っていた。

その時彼の周りに結界が出来て半透明の男が出て来た。

霊「どういうこと」

紫「紅蓮紫苑が2人」

紫苑「君達、それ本気？彼は偶然僕にそっくりで名前が同じなただよ」

霊夢たち「!」

紫苑「それなのに君たちはロクに話も聞かずに僕と勝手に決めつけて殺しかけたんだよ、君達は外道の中の外道、いや、それ以下だよ」

紫「・・・何をする気」

紫苑「彼の体を奪うに決まってるじゃないか」

「やらせねえよ」

紫苑「起きちゃったじゃないか」

「この体は俺の物だああああ」

そして彼に殴りかかった。しかしすり抜けた。

紫苑「無駄だよそんな嘘だ」

彼の体が消え始めた。

「何、「幻想を破壊する程度の能力」だと」

さっきのは俺の能力か。

紫苑「どうせ・・・君・・・達また同じこと・・・を繰り返す」
彼は完全に消滅した。

フ「紫音、愛してる」

目を覚ました彼女は俺に抱きつきキスした。

藍「紫様」

紫「終わったわ彼は無関係よ、ごめんなさいね」

藍「では、人違いですか」

紫「帰るわよ」

霊「悪かったわね」

魔「ごめんな」

萃「今度酒飲まないか」

フ「手出したら殺スヨ」

そして全員帰って行った。

レ「フラン大丈夫」

フ「お姉様、彼と何回したの」

レ「うわあああん甲也あああ」

レミリアは逃げて行った。

フ「お姉様可愛いね」

フランの部屋

フ「今夜は寝かせないよし・お・ん」
「何か嫌な予感がギヤアアア」
そして初めてを奪われた。

(フランドール編2・完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1638z/>

東方小説(仮)

2012年1月10日22時52分発行